

麻生路郎★主宰

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和十五年二月一日發行 第十七卷第二號（毎月一回一日發行）

川柳雅証



Pesoi flugas trans
la landolimon

193

★最高權威の月刊柳誌

川柳雑誌 二月號目次

表紙 寫眞(大同・九龍壁)..... 岩崎柳路
内外時事..... (七)

川柳二千六百年史..... 戸田 孤蓬..... (一)

「龍」に告ぐ..... 高鷲 亞鈍..... (二)

命名物語..... 小山 文三..... (五)

評 川柳一ト筋..... 路郎・某人・春巢..... (四)

笠森稻荷考..... (一) 麻生 路郎..... (三)

鮑の行衛..... 福田 山雨樓..... (七)

東京にホールドアップ..... 吉田 水車..... (七)

武玉川四篇研究..... 梅本 秋の屋..... (八)

台湾川柳社の人々..... 蛭子 省二..... (八)

云ひたい事を云ふページ(其の六)..... 塚越 正光..... (四)

かんにんぐ(病室手帖)..... 柳路・可宵..... (三)

貝 卸..... 形水・市多樓..... (三)

崩れたトチカ心臓..... 蛭子 省二..... (六)

同情週間川柳大會句報..... 岡田 某人..... (二)

漫畫陣中鏡..... 大森 風來子..... (六)

近作柳欄..... 北 みきを..... (五)

川柳塔..... 麻生 路郎選..... (四)

同舟近詠..... 諸 家..... (四)

集建國祭..... 前田 五健選..... (三)

各地柳壇..... 妹尾 八九満選..... (三)

川柳展望..... (二)

川・雜・案・内..... (二)

後 記..... (表三)

社關係の人々..... (表三)

★兵士は戦線に！我等は銃後に！！

川柳雑誌 二月の會

10日 夜6時(土)

★會場 御津八幡宮(電話南八六四〇)

★南區八幡町佐野屋橋筋角(木棉橋電停下車東一丁・八幡町市バス停西一丁)

★兼題 「船長」(三句)..... 麻生路郎選

★評話 「豆炭」(三句)..... 姫田夕鐘選

★會費 詠史川柳と私..... 戸田孤蓬

★呈賞 三〇錢(川協章提示の方は二五錢)

★呈賞 天位(各題)に粗品を贈る

★呈賞 詠事・豆炭・潮花・由布・紫香・里十九

大阪市西區江戸堀上通二ノ四六(昭和ビル)

川柳雜誌社

大火御見舞申上候

川柳人協會
川柳雜誌社

静岡川柳人各位

静岡に大火に際し

る募を金舞見御のへ人柳川

一、静岡の大火——その慘禍、大震災に比すべきものだと聞く。我等は同趣味者静岡川柳人の安否を氣遣ひ、その慘禍中にある人々にお見舞金を宛めて慰藉の一端をしたいと思います。左記により募金方お願する。

一、お見舞金は一口金五拾錢(幾口でも可)

一、お見舞金を本協會に委託されたい方は二月廿日までに届けてください。

一、お見舞金贈呈の方法は本協會に一任のこと。

一、届先は本協會静岡大火柳人お見舞金係宛(なるべく「振替大阪三一五一四番を利用したい」)

ルビ和昭大西の二通上堀江戸區西市敬大
會協人柳川

あ産のために

妊娠としての大切な責任はカルシウムを補給して諸病を防ぎ、子宮の収縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

植林醫學博士 推奨
片瀬醫學博士 監査



フダカルシウム錠

大阪道修町 和田卯助商店

菊正宗



店商納嘉本 會社株式



二千六百年史 (二)

戸田孤蓬



奈良時代

○奈良奠都 (一三七〇)

村が國都であつたり街が首府であつたりしては大陸交通の結果どうみてもみすばらしい。そこで出来たのが平城京、今の奈良公園あたりに東郊の美しい散策地であつた。

○大佛 (四二二)

こゝに天平文化の華が開く。聖武天皇は聖德太子の御志を繼がれて宗教が政治の上に確固たる地盤を築く事になり、日本の總力をあげて東大寺に建立した大佛の開眼の日が来る。

○和氣清麻呂 (三九一—四五九)

甘やかされたとつけ上るのが今も昔もかはらぬ人情、佛教徒の中から道鏡なんてしるものが出現して、卑官清麻呂に誠忠の名を残さしめる機会をつくる。大義名分教へに大馬鹿生れて

平安時代

○平安奠都 (一四五四)

奈良七代七十年の後、位置に

於てはるかに全體的な山城の京都へ都へお進めになつた。

平安京はじめは只の田舎なり荷車と糸毛の車京へつき

○坂上田村麻呂 (四七—四七〇)

身の丈五尺八寸胸の厚さ一尺二寸眼は鷹の如く鬚は金糸を編み云々と物憂い外貌をそなへたこの大將軍はかつて日本武尊に、近くは阿部比羅夫によつて企てられた蝦夷問題の解決に乗り出した。そしてよくその目的を達した。

○弘法大師 (四三三—四九七)

即身成佛と云ふ忍術みたいな密教を唐から傳へ、本家の支那さん今だに眞似にくい假名を發明し、やゝこしい神佛問題を本地垂迹説で解決して高野さんの奥にみろくの出現を穴倉の中であつてゐるお大師さん。

○菅原道真 (五〇四—五六三)

鎌足公の子孫は繁榮しすぎた今でもそのへんにうよくゐられるからうっかり悪口はいへない。併し一片の新鮮を加へようとして御採用になつた道眞を繼ぎまいちめして迫出すにもあたる

西風にせめて眞心つたへよう腰掛のあとに天神さんが出来

太平府の月には琴の音もきこえ、書き初めを初天神に納めて来

○藤原道長 (六五—一六八)

春日さんの氏子で出世頭は鎌足公。騎頭はかく申す道長殿飽きつぱく龍頭鶴首から降り満ち足りてさて道長の不倖

○紫式部 (六三—一六九)

静かな平安時代に、強烈素樸な萬葉調は忘れられた。藝が細かなうたつて来た。日本式と云はるか、そこから源氏物語の尤大な心理描寫が生れた。

○莊園 (二七五)

大化改新の班田收受、口分田の實行は理想倒れになり勝ちだつた。中央が政治をほつたらかしたしてゐる間に地方は群盗の巢と化し、力あるものゝ土地兼併は激化した。その中から武士が産れた。

○源義家 (二六八—一七六)

武士の中の武士は智に勇兼備の人でなければならぬ。それが前九年、後三年の兩役で榮名をとどろかした源義家だ。風流を養められ逃がしても貰

かんしやくを押へて雁に教へられどしの袖の櫻は歌となり

○源爲朝 (二七九—一八三)

地方鎮定にはじまつた武士の効用は内証した。殺人専門の連中だ、内証してゐるものに狂ひが来たからたまらない。源平盛衰記となつて洛陽の紙價を高めさすのみ。

○平重盛 (二七九—一八三)

中央覇權の一番乗は平家、統領清盛からして知恵が足らぬ。藤原氏の眞似をして驕る平家となり、只一人山淑の様な存在重盛が修身書にのこる。

○源義經 (一一八—一四九)

重盛に比べてとはるかにあばれん坊の義經、ロオマンと云ふ言葉で地をいつた義經、小説に語り語り芝居になり。思ひ出は勝つた昔の事はかり戦には勝つて勝てない兄がおり

○平家滅ぶ (一一八—一四九)

日本史上壇の浦の殲滅戦程美しくも哀れな物語はない。平家琵琶の翳々たる音律は永く人士の胸を傷ましめる。敗け切つて次の逃げ場は龍宮早稲の瀬戸に繪扇浮き沈み

○鎌倉時代

○源頼朝 (一一八—一五九)

伏見の里で別れ、石橋山の旗學以來應援する丈さした義經を範額を殺した頼朝は殺された連中よりもつと淋しい人生であつたにちがひない。地固めを他人まかせにした彼は三代にして亡ぶ。

○北條義時 (一二八—一八八)

都はなれて百五十里鎌倉にゐるだけ猜疑の眼が光る。後鳥羽上皇の朝憲恢復の大御心を御受けする事が出来る、子泰時等の大軍が京へ上る。

○北條時頼 (一二八—一三三)

御親政に双方向はすと稱するも彼等の惡逆は永遠に消ゆるものではない。併し北條氏も爲政者としては時頼の善政など見るべきものがあつた。

○松竹梅焚いてしまへば小さい

○元寇 (一二三—一二四)

蝦夷征伐もあつた。三韓征伐もあつた。けれども國難と呼ぶ程のものは元寇を以つてはじめてとする。さればこそ有史以來の民族的團結が一塊の火と燃え、神風も又吹き給ふたのであつた承久以後元のスパイは見逃さず矢の急使豫言いよくあたり

○千早城 (一二九)

元寇で鎌倉幕府は金を使つた功將に一寸の土地も與へ得なかつた消滅戦の悲しめ、時宗の子孫は内外より攻められはじめた後鳥羽上皇の大御心は後醍醐天皇によみがへり、楠氏は錦旗の下千早を中心とする金剛山大要塞に天下の賊軍を引受ける。計略とさつた時はもう片輪峯越えたそこにも出城又一つ

○新田義貞 (一二九—一三九)

關東源氏の末裔新田義貞は先ず御味方に加擔して暗愚なる執權北條高時を鎌倉に攻めほろぼす。田樂ときいて義貞下知をする



貝 釦 岡 田 某 人

「龍」に告ぐ

川 柳 仁 義 (Ⅲ)

高 鷲 亞 鈍

舊臘「龍」が創刊された「昭和川柳」の脱退組ださうである。旺んな意欲を持つグルウブらしい。大いにやる可しだ。此種の革新派は柳壇にあつて数多生れ出てよいものだし、且つ片端から消えて了つても構はないのである。斯ういつた波のうねりは激しく、高く、厳しく柳壇に荒れ狂ふことを望ましい。

それは破壊と建設を約束する分裂と綜合によるダイナミックな運動を勃すことは、既に柳壇を新鮮にし、活潑、明朗化するからである。しかも尙川柳の本道は、大海の千尋の底にある如く洋々として動かないのである。

吾々にとつて将棋は一つの娛樂である。然し新聞紙上にみる高段者棋士の手合は、まさしく盤上が生活であり、その譜は眞實を刻む爲の全身全霊を賭したものでなければならぬ。将棋を娛樂とみる限りは将棋は民衆のものである。しかも吾々はそのチャンピオンを喝仰する限りは求道の士でなければならぬ。川柳を娛樂とすることは民衆のものである事を意味する。川柳が民衆のものである限り川柳は正しい。この民衆のものである

ものであつた。斯くてそれらが民衆化したとはいへ、決して棋道や角力道が墮落した理由は微塵も發見出来ないものである。それは寧ろ近代精神による高度の棋道であり角力道でもあつた。そこに棋士の自律性があり、力士の存在理由がある。民衆の目こそは、案外確かなものを認めてゐるを、こゝで肯定せざるを得ないではないか。

かんにんぐ

——病室手帖その四——

蛭 子 省 二

昭和十五年元旦、私の口へ最初にはいつたものは、アンナカの頓服である。残念ながら、今年もこの病室手帖を續けねばならぬ。

病褥のある日、小唄の文章で社會觀察がしてある、「人生不連續線」(寺田瑛著)を一氣に讀了した。中に「カンニング」といふ項目があつた。續いて「川柳大陸」の舊號をもみた。

病中は古雑誌に少なからずなつかしみを感ずるものである。すると、「本町人」なる者が、英譯川柳を又十七文字になほしたSM君の還元句を、カンニングだと言つたのに對し、御「職掌柄」から、大にキメつけた後で、「本町人は他人のやつた事の批評に費す精力を節して御自身川柳英譯をしては如何」と、飛沫が浴びせてある。翻譯

※ 室生犀星。——鍋の底に残つた煮つまりすぎのストチュード・ビーフ。うま相に見えるが、カスが残る。こつてりしながら、滋養分は案外すくない。みんな汁と一しよに蒸發してしまつてゐる。すぐむかむかと來て、うっかりすると胃をこわしてしまふ。

※ 牛乳色の高臺の朝、落しものが濡れて見付かる。ヒマラヤ杉のチョコビチョコビとした櫛の目のあひだから、薄日が反へすガラス障子。風景は新鮮なんだが、無くなつて、そのあとに二軒の家が建つた

※ 取りこぼたれる屋敷。はじめにギヤレージが庭門から、石や大きな樹木が、時を置いて運び出されて行つた。俄に、門も塀も、塀の外の幅の廣い溝にも、その上にゆるやかな弧を描いて架けられた古風な土橋のあたりにも、落莫としたものが漂ひはじめた。大小二匹ゐた犬もその頃から姿を見えなくなつた。さ

※ よろこびは揮發する。かなしみは沈澱する。

※ ホルモン混入。ビタミンA、B、C、D……etc. 其の他高貴藥配合。——そう云へば、神戸は外國の何處かの町ぢやないか。

堀前平野町
紅蘭亭
北浜三七五三番

北京料理

西區土佐堀船町
白蘭
六九一
土佐堀 二二四四
三六二六

う云へば、門の奥の方で、病んでゐるらしい犬のうめき吠えがその少し以前に聞えてゐたやうであつたが、その、決して姿を見せなかつた犬はどうなつたであらうか。その家の取りこぼれるに至つた事情は全然判らないのだけれど、たとひそれがどんな事情によるものにもせよ、廣い大きな屋敷が無人になり、次第に崩れて行くさまは氣持のいいものではない。

そのうちに往來に面した塀(何といふのか屋根のついた塀だ)が、溝をへだてた一丈ほどの高みから取りのけられて、雑木の疎らに残つた庭園が人びとの眼にさらされた。残されてゐる石燈籠がそのあひだから見える。しつくりと落付いた座敷の雨戸をとざした姿も明らかに現はされた。何年、何十年と静かに住みふるされ、幾人かの人があつたであろう純日本風な建物の上半分が、浅春のうす曇りの空の下に寒むと出て來たのだ。檜皮葺きの、もうどうにも外しやうもないやうにびつたりと似ついてゐる庇の上に、もう二度と、丁度その横にある櫓の梢から花の落ちることもないだらう。そしてみるみる塀を取り拂つたあとの赤みを帯びた土が崩

されて行つて、往來に沿ふ枯れた溝が埋められてゆくのだ。また、く間に、此處にも當世風な應接間を持つた小さな家が幾軒も建つて、渡り鳥のやうに住居を變へてみづから何の怪しむところのない勤め人たちが、いろんな生活を持ちよつて、雑多なおしやりや嫉妬や、下司っぽい笑ひで其處の静かな空氣を亂してしまふことであらう。そして毎日のやうに其處を通つてゐた人たちも、そんな静かな家がそこにあつたことなど三月と出でずして忘れ果てしまふにちがひない。それは淋しく痛ましいことであるけれど、仕方ないことでもあらう。——私はその家の人たちがどんな人達で、どんな理由からその住居をそんな風にしたのか全く知らないけれど、それでも、塀をのぞき、庭をこぼつて、ひつかきまはされてゐる姿に對しては、冬空を眺める時のやうな氣持ちなしに見ることは出来ない。急に忙し相になつた邊をうろろしてゐるオーバーコートやら、猪首の羽織オーバーの背中あたりを見てとほりながら、ふとやるせないものを覺えたことである。

夢に身を持ち崩してしまつた上からは、何ともせんすべがないではありませんか。

養もいつしよにしてから説を立てる。現に難炊ばかり食つて居るのでも體立て得る。而して「本町人」なるヤツは、本町居住の私のだから、未だ婆婆氣はありといふべしだ。

私は今尚ほカンニング禮讀者だ。恐らくカンニングをやらぬ者は存在しなからうと思ふ。私は書と名のつくものは三角形さへ描けぬので、同級生の描き損じを貰ひうけ持参すると、先生(洋畫家)は笑つて居られた。流石に藝術家だと有難かつた。京都圓山公園にヤマモテルが建つた時、風致を害するとマツチを懷にして徘徊された那智先生は、試験時間には衣冠束帶で教壇に居られた。私がカンニング役を引受け、數人同じ答案を提出する。決して落第點はつけられなかつた。後に桂月と催馬樂研究に没頭した筆曲大家。斯う云ふ先生達の磊落な洒脱な腹のある感化は終生忘れられぬ。私のカンニングからの賜である。

峰間商大教授は「青年教養の革新策」に於て、「第一に學術優等、次に品行方正と云ふやうなことを、一國の教育の眼目としてゐることが、適當であるかどうかと云ふことは、篤と反省考慮して見る必要があるのであると思ふ」と。それは積極的に犠牲的に働きのなす者が欲しいといふので、マラソンの日比野翁の話も引用してある。「他人の爲のカンニングで、俺に怒鳴りつけられたやうな者は、とても

感激性があつて、不肖ながら我輩の銅像を建てること云ふことに頗る奔走してくれたものだ。一番二番の成績を採ることを一大事と心得て居るやうな者は、そ

書け一冊に 全国便美

柿泥棒や笥泥棒などは、盗む方にも盗まれる方にも詩趣がある大喝一摩竹の子を捨てゝにげ、である。

私など永年古句研究を志して居るが、悉く世人の著書からのカンニングだ。而して公私を混淆する融通性の極致こそ、自利利他精神の實現なのである。

【補記】病室手帖(その三)に、龍寶寺の風の碑は、田畑松軒書である旨を陳べた。舊派の冊子記事には悉く田畑姓になつて居る。處が阪井翁が神田

お成街道の書畫屋田嶋、廣田書店などをあざられた際、天保七年廣益諸家人名録を求められたのに依ると「タの部」



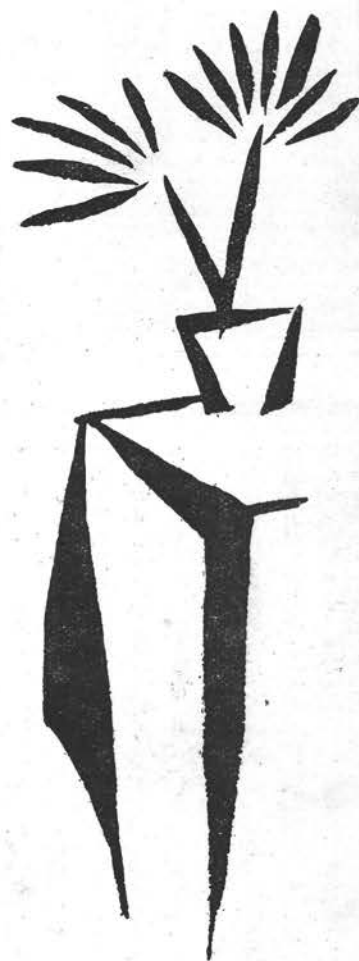
淑髮ウエーヴ

大阪・心齋橋筋周防町角

ナショナル

子倫口山
營經
電南992

選郎路生麻



大津酒井美知夫
陸軍病院

同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

松山岡漫步

京都福田丁路

北京にて(三句)

迎春

大阪府 米本貴志子

新內閣成立

入試制變更

大阪米谷松太樓

大坂田中風流

同 同 同

塚越正光



社支配人といふ社會人で、演藝

句家を増やしてゐる。

牧野六香 台湾公論編輯長とい

しく想つてゐる。

長火鉢猫を羨むこの苦勞

龜山光子 台灣の閨秀作家の代表として欣然同人に参加した、良家の奥様である中年でインテリで美しい、そして句作には物凄くまで熱を持つてゐる。

産室の前で姑は汗をかき

吉鹿優芽二 台灣柳社の前身の前身、柳の芽吟社の創始者、童謡作家として古く著書もある。現在は台灣勸業無盡株式會社重役附である。そして國姓爺の署名人。

戀猫の挑まれるまゝで居り
高山碧川 台湾總督府内務局十
木課勤務我が友亂耽と同一年で

ルービヒサア

大日本麥酒株式會社

懽曳に知らず劇場アナウンス大阪寺尾破衣

飯事の子に女房の癖をみる
同

で其女の子に、しめと命名した。純情で生一本の主は、前の庄屋

純情で生一本の主は、前の庄屋



銃後小景

子の殊動記事よみかへしよみかへし 朝鮮 姜弘龍
 失戀へ情ありません酒をつぎ 同
 抜毛して重役まではまだ遠い 同
 當らない債券妻は二枚もち 尼崎 小林文月
 御主人が顔出す程の客ぢやない 同
 水兵服客にだかれて一寸てれ 同
 無情みや云はん鏡の正直さ 朝鮮 高原恩源太
 甥出征(二句)
 俺の分まで働けミ慰問品 同
 病氣ではたはれてくれなそれつきり 同
 アバートの客は外から一度呼び 大阪 種瓜平
 嘔みつく言はれる程に男酔ひ 同
 又一つボタンが落ちたひりもの 同
 裏街に名譽の家が立ち並び 奈良 嶋田翠峯
 戦地から来るばかりなり筆不精 同
 お互ひに輕蔑してるプロミブル 同
 安つほい顔か再々間違はれ 廣島 近藤須彌浩
 遮斷機へ漫畫通りに並ばされ 同
 末ッ子の理想を母は持て餘し 同
 咽喉首をしめる手付でもぎる餅 大田 抱逸
 生活に負けまいとする餅を搗き 同
 統制へ暮しを細く引きのぼし 同
 失職のそれはあわれな下駄で来し 松山 芝田靈子
 外に聲あり子供等のグループ 同
 エンヂンのかゝつた朝の製材所 同
 迎年新世
 神も照覽二千六百打つねがひ 海拉爾 小川靜觀堂
 同友池上清水急逝
 國も果てなれ追悼號へ寒う書く 同
 妓來れば酒なりき春なりき 同
 下積の誇り課長よ御存知か 岡山 鈴木九坡
 元旦が淋しく金錢登錄器 同
 都合する氣でた除夜の鐘をきき 名古屋 鈴木可香
 旅すれば旅で萬歳の旗を振る 同
 靴下は僕はいかないよ勇士の子 同
 蔭膳に鯛がはねたる春の幸 同
 俗惡を好む男で胸を病み 東京 田中青風
 制服を脱いで帳場を手傳ふ娘 同
 ハンカチの白さ音楽通云ひ 同

三月の風にわらうた馬の鼻

その内の一人がマツチ持つて居り 同
 二十の戀はスフのけんらん 同
 犬に座蒲團子なき淋しさ 大阪 加藤ライト
 砂糖不足一人一斤 同
 砂糖屋を出れば夫婦だ笑ひ合ひ 同
 「白蘭の歌」より
 國際愛川ある道を散歩する 大阪 山本葉光
 大陸は男の死ねるまこばかり 同
 小林部隊長戰死
 蒙古風怒かつた後のものさびし 北支 宇敷桃水
 人生觀
 さほてんの平凡さあり生きて居る 同
 元旦は足袋の白さに腫が疲れ 大阪 平川久枝
 ロマンスもあつた結納知つてゐる 同
 旦那を信じおみくじの卦も信じ 京都 八田鐘生
 湯豆腐や鼻の先から温つたまり 同
 木枯へ母をのこせし故郷戀ふ 大阪 青野笑門
 感謝々々いっしか戀に變つてゐる 同
 民謡が窓ぬけて来る灯に坐り 兵庫 森本秋子
 名取りまだ男嫌ひを捨てずゐる 同
 職工も課長も同じ奉仕隊 大阪 並木南風
 醫者去んでからの皆は泣いた顔 同
 鼻聲で休暇貰ひにやつて来る 下關 東方司半休
 連綿と浮世も二千六百年 同
 大晦日ナイトキヤツプで市場へ来 大阪 津路紅多呂
 ゴミじつとして動かない元旦の河 同
 別嬪の車掌切符を切りに来す 大阪 藤森小雅子
 美しい美しいばかりの女事務 同
 病室點景
 院長殿月下氷人に成つて欲し 岡山 尾崎綠柳
 ○○婦人會員の如何ですかに堅く成り 同
 もんべいはショウウインドウで飾る 大阪府 石浦征野
 俺のいふ言葉そのまゝ逆用し 廣島 得能紫浪
 物質騰貴ボーナスの割を馬鹿にする 朝鮮 崔宗錫
 ボーナスでアパートにじつとおちつき 尼崎 江口正路
 日の丸が形見となつて戻るなり 下關 田丸蘭京
 戦勝を祈る男の眉秀で 名古屋 長谷川長樂
 羽子板が十六ミリの中で笑み 大阪 今西湖秋
 女なり娘十二で媚を知り ホルル 古川風竹

さんの話と同じ様に、これで打ち止めとするつもりで、とめ女と命名した。

罪のない我兒に手前勝手な、呪の様な名をつけて、造化の神秘を冒瀆するなンテ、凡そ意味のない事であつた。
 果して戯談が眞實になつて、とめ女のあとに又女兒が生まれたのは皮肉であつた。
 最早これ以上女の兒は欲しく

崩れたトーチカ心臓

車中にて 大森風來子

三等寢台へ飛び込んでみるとどの室も満員。空いてゐるのはホネムーンらしい二人きりの席。クえいと氣合はけなかつたが悲憤な覺悟と勇氣を出して同席となる。
 新婚は昨日の不平を洩らし、新婚は汽車の長さもうれし。新婚の花嫁地圖を持ちつきり花嫁は蜜柑の網を手をにまいて落ちついて見えた花嫁が見え花嫁が何か見つけた汽車の窓

(このあたりから)
 淋しさは花嫁の聲聞きとれず
 吳騷停車
 言ひ負けて夫騷實へ聲を出し腕組めば花嫁らしく見えぬ。しやべらずにゐる花嫁のそれ

たはこの輪午後の日ざしへパツト散り
 幾ら戦場で鍛えたトーチカ心臓の俺も、もうこれ以上見ておきれぬ。お互にぐらりととはつきり疲れを見せられてゐる。俺もいさゝか疲を覺へ、無理やりに眼をつむる。

高瀬止齒科醫院

特科
 レントゲン・紫外光線
 高瀬志可

東區内北濱心齋橋筋角

電話 東 四四二九番
 北濱 一九二三番

東京にホールドアップ

吉田 水車

◎五尺に餘る生鯉のあらをもらひにめりやした、と言ふのは御案内の幡隨院劇の名場面ですところが皇軍の威武に靡びいた楊子江には一メートルから二メートルの鯉が實際に居るそうですから長兵衛さんも苦笑して御座ることでしょう。

◎白を黒と言ひ張ると言ふことをよく申します。これは正邪の逆を言つたものですが、そんな嚴重な意味でなしに書に書いた雪は正に白いものが黒く降つてゐます。もつとも白い部分が雪で黒いところが其すき間かも知れません。

◎東京にホールドアップがあると言ふと穩かならぬ話ですが、省電で通勤する友人の話ではラッシュアワーにどうした拍子に手でも挙げたら最後着降降降すこととは言ふ事實なのであります。

靴の行衛

福田山雨樓

暮れもあはたらしい十二月某日小生が警視廳の地下室倉庫へつれて行かれたと、御想像下さい。國の兄が岡山から二驛程乗車した際古いカバンを忘れたのです。その中には○警察署の大きな判の据つた古物台帳が一冊、これが大切だつたのです。そのカバンがどうです。東京行の列車の中で無事東京驛に着き三日経つてから警視廳へ運ばれ他の遺失品と共に風呂敷に包まれ、あの薄暗い倉庫の中で欠伸をしてゐたのです。そのカバンに相違ないか」と云はれてカバンの中から證據品を取り出したとき何だか犯人を捕りおさへたやうな気がしました。おびたらしい、實におびたらしい遺失品の山の中で。



云ひたい事を云ふ
ページ
(其の六)

オペラから

岩崎柳路

北京の石原青龍刀氏が豫告なしに來張された。奉天時代以來の久振りの歓迎の言葉を知らぬほど嬉しく懐しくお會ひした。拙店オペラのスペシャル、ルームで黒松で乾杯し深更まで川柳談が盡きなかつた。

過ぎし日に路郎先生と北支蒙疆を川柳旅行した話、大谷五花村氏と和山黙然人氏とに同道して大同石佛寺見學の話、宮尾しげを先生及早稲田大學の印南氏を拙宅で歓迎した話等々で柳談がそれからそれへと續いてゐた。其間、石原氏の口から漏れてゐるな、の連發に閉口した。

それ其の等私等夫妻の奉天時代(去る昭和四年に渡滿後、滿洲時變直後まで)放浪生活だつたのが熱河時代を経て北支へ進出し、今では蒙疆で唯一の店に

旅先の三流館

大坂 形水

★月の半分は旅で暮す僕は、よく知人から各地の名所見物など出来て可いですなと羨まされるが、其の實商用などの都合で遊ぶ所へは一向行つた事がない。廣島へは十年餘も毎月來てゐるが、宮島見物も取引先の招待でたつた一つべん行つたきりである。勿論、そんな調子で柄の鯛網も未だ知らぬ。一つは何日でも行けると云ふ氣があるのと、晝よりは夜、表よりも裏、人前が嫌ひで、獨り氣儘な氣分で居る方を好むと云ふ、僕の性格から來てゐるのかも知れぬ。

★松竹座の一等席で觀る名畫の感激もさることながら、旅館の丹前にオーバーを引つかけて、旅館の近くの映畫館へ出掛けるのもまた趣味のあるものである。

短歌會を覗いて

池田 可宵

この頃短歌の會へ顔を出して

る。大阪で見損つた名畫を忘れた時期によくこゝで拾つて、古本屋を漁つてゐて、掘出し物を得たやうな嬉びに浸ることが再々ある。「裸ノ町」「愛郷郷」「地ノ果」「放浪兒」「モロッコ」等々、數へればきりが無い程こゝの二十錢の入場料で觀たことになつてゐる。シューヴアリエ物と總じてフランス映畫は、松竹座等で觀るよりは、旅先の三流館で觀る方が、雰囲気ビタツと来る。デイトリツヒの唄等は斷然此んな映畫館で聴くべしである。

愚痴

多田市多樓

皇紀二千六百年を迎へて、愚痴とは、おそれおしい事であるが理窟が充分にあるから愚痴るのである。三十をやつと一ツか二ツ出たばかりで、後頭神經痛と、坐骨神經痛、それも二千五百九十八年の春より、六百年を迎へた今日足かけ三年物資に辟易せずとも日常生活に辟易せざるを得ないのだ。無理からん事とは思ひませんか。小生の妻がそれですもの。

★内外時事★

- ★阿部内閣總辭職(二月十四日)
- ★關西電力制限強化、外燈に設置燈制
- ★靜岡大火、六千七百戶全燒
- ★米内内閣組織(十五日)
- ★米内總理大臣 米内光政
- ★外務大臣 有田八郎
- ★内務大臣 兒玉幸雄
- ★大藏大臣 櫻内幸雄

に患疾性膿化・炎耳中・病人婦・疾淋

劑法療學化ドミアンオフルズ基二の初最産國

錠ルジベルア

會商品藥内之山 株式會社

りあに店藥

東廣・天奉・京北・京東・阪大

陸軍大臣	海軍大臣	司法大臣	文部大臣	農林大臣	商工大臣
吉田善次	木村吉太郎	松浦清	島田久	藤原銀次郎	藤原銀次郎
吉田善次	木村吉太郎	松浦清	島田久	藤原銀次郎	藤原銀次郎
吉田善次	木村吉太郎	松浦清	島田久	藤原銀次郎	藤原銀次郎

湿布に

エキホス

感冒、肺炎、乳房炎、腰痛、等の遺憾なき手當に

月経痛、齒痛、

包裝 100枚 200枚 500枚

一研

武玉川四編研究 (三)

梅 本 秋 の 屋
森 子 省 二 魚

(51) 若葉の笛の前に百錢
省 二

秋の屋 若葉の笛といふのは、棒などの葉を巻いて、兒童が吹く笛であらうが、それと百錢との關係が全然不明で、青葉の笛ならば解釋が出来る。

東 魚 青葉の笛なら賣物ともいふ貴いものだが、若葉の笛位の玩具同様のものには、百錢投出して買ふとでも云ふのか。或は、まさきのビイ／＼などと賽錢とが、投げ出されてある光景か。

(52) 一口で躍をおどる唐からし

省 二 辛いといふに、それみたら「躍を躍る」、「舞ひを舞ふ」など、古句には多し。

秋の屋 躍をどるは滑稽味は有るけれど誇張に過ると思ふ。

東 魚 辛いので飛び上がる。それを躍ると誇張したのであらう。

(53) 傘を掛ける柱は行とまり

省 二 傘は毎日必要な品でないから、行止りの柱に掛けて置く。これで邪魔にならぬ。

秋の屋 是れは腰々見受けるところで、少しも舌味の無い句である。

東 魚 何でもない句で、何となくユーモアな所がある。

(54) 大判は懐に居る金でなし

省 二 小判ならば兎も角、大判など懐に入れて居る金ではない。大判は關取ほどの取廻し(武17)なのである。

秋の屋 昔の大判金といふものは、今の百圓紙幣の如く、通用したものではなくて、平素は眞綿にて包み置き、墨書した文字が磨滅すると、それを後藤に持参し、文字を書直して貰つたといふ事で、その書直し料が銀一歩であつたといふ。

東 魚 懐になどさう手軽く持たれる金ではない。ちやんと藏の中に居る金だといふ、大判の貴さをかう詠んだもの。

(55) たらいの雨を屋根葺に見せ

省 二 この通り漏るのだから、十分直して貰ひ度いと指圖をする。類句「屋根葺を呼んで盥の雨を見せ」

秋の屋 此處が漏るとて盥を見せるので、其の雨を見せるのではなからう。

東 魚 此處がこの様に漏るのだと、位置も溜つた雨水もみせる心持ちであらう。

(56) うくひすの飽られる頃はり上る

省 二 初めのうち珍しいので驚々と云つてゐたが、聊か飽きがきた頃に、驚は音を張り上げる。而て、やがて老驚となり音に入り、衰へて鳴かなくなる。

秋の屋 驚は夏に入つて老いた方が、却て啼音が高くなるものである。

東 魚 食物の走りを賞味するのと同じ調子で、驚も其初音を珍重するが、本當によく鳴く時は飽きられるやうになる。

(57) 正月にかき廻される十二月

省 二 正月の爲に悲喜劇もある。秋の屋 正月を迎へる準備に、忙殺される

といふので、悲喜劇を演ずるのではなからう。

東 魚 前説の如く忙しい思ひをさせられると云ふ意であらう。

省 二 お説通である。前に解説した二篇に、「雨風にかき廻はされる十二月」があつた。

(58) 鯉の師匠の桶伏に逢

省 二 鯉に誘ふ師匠だから、桶伏位には逢ふ。平氣でもあらう。後始末には相棒の弟子がゆく

秋の屋 師匠は即悪友である。

東 魚 師匠は鯉を喰ふ事を教へた友達と云ふ意味であらう。

省 二 勿論。師匠は其道の先輩の洒落。

(59) 御つゝら馬の首は正直

省 二 旅の荷物の葛籠を背負つてゆく、はたご馬。首はまづ直ぐに、向ふをむいて引かれてゆく。

秋の屋 御葛籠馬といふのは、近松の淨瑠璃「丹波興作待夜の小宮節」に、「台所荷は次傳馬、御葛籠荷物は通し馬」とあつて、大名の參勤交替などに使用されたものらしい。

東 魚 首は正直の意が、色々にとれさうに思ふ。例へば姪子氏のやうに、或は重荷に疲れたのは、首をたれて行くとか。

(60) 十日めに出来は葉さへ面白き

省 二 五風十雨。秋の屋 面白きは、何か外に適切な語有りさうに思ふ。

東 魚 毎日葉のいる様な天氣ではクサ／＼するが、たまに義などは風流な氣もされ、面白きであらう。

(61) 大工は屋根屋よりも男氣

省 二 大工の方が勇しい——たつて比較せよといふならば、そんな氣も致さう。

秋の屋 大工は多く勇肌であるが、屋根葺は木訥であつて、大工の方が男氣があるらしく思はれる。

東 魚 といふ、よそ目に思はれる。

(62) 百度参りのかわく唇
省 二 經を口づさみ、念じつゝ、お百度をふむので、口もかわく。

秋の屋 此の百度参は、大方日蓮宗の信者であらう。他宗の信者ならば、唇の軽くほど經などはよまぬ。

東 魚 ひどく緊張すると口が渴く。百度参の動作の上からも、渴を覺えると云ふ方であらう。

(63) 向けられぬ顔は濃くなり薄く成

省 二 不沙汰の顔に合ふ面かなし(武2)で、たゞの不沙汰でなく、顔も向けられぬ程、義理を缺いた場合。

秋の屋 不義理の顔に相違ない。併し「濃くなり」は少し可笑しいが、これは厚顔の意か。

東 魚 濃くなりとはカツとして赤くなるのであらう。薄く成は冷汗三斗の思ひで、顔も血の氣を失ふ心持ちであると思ふ。不義理のあるに違ひない。

(64) 挑灯さけて底のある妻

省 二 女房は土手のあたりで髪かとけといふ句がある。挑灯さけて土手を行くのではないか。底は心底。

秋の屋 底のところが不可解である。

東 魚 挑灯てか、避けてか一寸分らぬ。避けの方なら寧ろ「よけて」とやるかも知れないから、提げてらしきはある。何かわけのある様子といふのを底と云つたのであらう。質屋通ひでもあるか。

(65) 一段聞て歸る仲人

省 二 仲人の御役目柄御苦勞、娘の家で(一段文で)大助りか何々。

秋の屋 聲になる男の淨瑠璃か。嫁になる女の聲か。

東 魚 若夫婦の處へ、その仲人が來たのではないか。尺八と唄などの合奏で、あてられて歸る場合などかと思ふ。或は夫婦間のも

松坂俱樂部

會員募集

川柳講座

川柳雜誌主幹

麻生路郎先生

擔當

はみ込申御
樂俱坂松 階七
〇〇三戎(表代)話電

松坂屋

大 阪 日 本 橋

あらゆる趣味のお稽古場

手はさきから奥義まで
氣軽く、楽しく、御上達

め事で、一方の泣言などを一段聞かせられるといふのか。

(65) 目の赤い人恥かしき松の内
省 二 眼を赤くして居る人が、いかにも呑み廻つて許り居る様で恥かしいのか、？。
秋の屋 夫と喧嘩でもした人妻ではない歟それでなければ、目の赤いのを恥る理由がない。

東 魚 かるたなどの賭勝負に、夜を更したので、金銭を賭けてる事が恥しいのであらう。

(67) 逢ぬ戀人に嘯して仕廻けり
省 二 逢はぬ戀なればこそ、深いいきさつにも到らず、遂に人にも打明咄がなし得られる。

秋の屋 絶る戀ならば人にも語られるが、逢逢はぬ戀では如何であらう。

東 魚 岡惚れだけに了つた戀を語るのであらう。「仕廻けり」に、じつと胸に秘めてゐたのを堪へ切れず人に話した心持が思はれる。

(68) 海へ流れる三保の鹿の音
省 二 三保の松原の風趣ならん。
秋の屋 三保の松原に鹿が栖む歟。是れは大いに疑問である。

東 魚 三保の松原は、私も清水港に居つた時數回行つたが、昔鹿のゐた話などは聞か

なかつた。三保神社の境内に飼はれてゐたの
かも知れない。

省 二 昔々野馬がゐたとの記事はある。
鹿がゐたら名所圖會に、一筆描いて置いて置
れたらよかつた。

(69) 浪人の三十日 〳は主の恥
省 二 浪人の三十日につける藥なし(武
武15)で月末、金のあつたためしなし。其度
に舊主の噂も出る。

秋の屋 主の恥を言ひ立て、借金と言譯
をするやうな浪人ならば、少しも頼もしくな
い奴である。

東 魚 月月末に金で苦しんでゐる舊家臣
を見捨て置くのは、寧ろ舊主人の恥とも思は
れるとの意かと思ふ。

(70) 鯉も折く殿のいたつら
省 二 折々といふに至つては、仲々のい
たつらである。殿様は、そんな勝手な事は、
容易にはなし得られなかつたものである。

秋の屋 白無垢鉄火とは、斯るものを云
ふ。

東 魚 俳諧でもせる通人な殿様であらう
(71) 十七日や景清に逢ふ
省 二 景清をつかまへに出る十七夜」。
景清は頼朝を討たんと、常にねらつてゐた。
十七日は観音緣日。彼は清水觀音信者。例の
阿古屋一件でもわかる如く。

秋の屋ニ十七日やの「や」の字が贅疣だ
東 魚ニ今日こそは十七日であるわいなと云ふ心持ちの、「や」であると思ふ。

(72) 野分の屋根をおりく傘
省 ニ秋の暴風に屋根が損じてしまつた。何んとか始末をして置かねばならぬので其後少し静まつた時に、傘さして屋根に上つてみる。——初篇には「二百十日の屋根に浪人」があつた。

秋の屋ニ是れは無理に作つた句で、暴風雨中に傘は差せるもので無い。

東 魚ニどうも、さういふ悠長な事は出来なささうである。野分のあとの屋根とみれば名残りに止み切らぬ雨の中を傘さして屋根に居る處が、趣がないでもない。

(73) 谷中まで文が届けは雨に成
省 ニ谷中といへば、感應寺宮、螢、櫻いろは茶屋が頭に浮ぶ。蔭馬に文をやるのか空は變つて雨となつた中を通ふのか。

秋の屋ニいろは茶屋から文が来るならば、先づ解釋が出来るけれども、他から来るのでは。

東 魚ニ場合がわからない。花時の谷中を訪れやうとの手紙でもあるか。曇勝ちの空は、谷中へ行く頃には降りだしてきた。谷中の雨に逢ふ文使、趣はある。

(74) 此年て中直りとは恥かしき

省二 年とつてからの夫婦の大喧嘩。中直り元の女房の聲に成り、「中直り忘れたやうな笑ひ顔」などには、若さがある。

秋の屋 命長則多辱で、何とも言譯が無い東魚 喧嘩したと云はないで、中直りとではキカセた處が面白い。

(75) くら闇で聞けば按摩も細工也

省二 くら闇で按摩の通るのを聞いて居るのも、一つの興趣である。

秋の屋 按摩が街頭を歩きながら吹く笛も少しは技巧が有るといふの歟。

東魚 秋翁説の如くであらう。闇だけに笛の哀調が強く感じられる。

(76) 珠數さら／＼とからい世ま經

省二 珠數を、さら／＼とмонде、世智辛い世の中を過す事は、一ト通りでない。

秋の屋 山伏や法印などは、世間でも餘り依頼者が無い故、細々と其日を送るとであらう。

東魚 珠數の如く中々、サラ／＼とは世渡りは出來ぬ。

武玉川四編研究正誤表(一九二號分)

九	八	八	九	九
二	一	一	一	二
二	三	二	二	二
二	三	二	二	二
當	尺	その	慾が	か(原本)
掌	との	三字を削る		

(眞)(段)(行)(誤)(正)



笠森稻荷考 (二)

麻生路郎

土團子のこと

笠森稻荷について、誰もが興味を持つのは拜殿に供へられた土團子であらう。

一見して土團子の表面はザラ／＼してゐる。色は薄い土氣色で、大きさは卵を押しつぶしたほどの嵩である。信仰を持たない人達から見れば、これが諸瘡に利く？ミ云つて眼をみはるに違ひない。實にラフな感じのする土の團子である。

(笠森稻荷社社頭の洗手)



江戸の瘡守稻荷の土團子は何處の土で作られたものか知らないが眞上の笠の森さんに供へられた土團子は附近の山から取つて来た土で作られたもので、近ごろでは近くの信者よりも遠方から参詣して来る者の方が多い、土團子

稻荷の本来本元であつて、今は笠森神社と云つてゐる。

拜殿の前には繪馬が無数にかゝり、土饅頭が盛つてある。此の神社は知る人ぞ知る瘡守さんと云つて、瘡毒に効顯あらたかで随分と遠方より参詣する者もある。

この笠の森さんに願をかけるには、先づ参拜をして神前に供へてある土饅頭を食用だけ戴いて来る。それを粉にして患所にふりかける。毎日洗つては新しい粉を振りかけ／＼すると癒える。さうすると、前に頂戴した土饅頭の倍數を造り、それを持て御禮参りをする。これがなか／＼効百パーセントで、筆者などは勿論家中クサが出来る毎に参拜するが非常によく効く、全く感心の外はない。かうなると科學萬能迷信打破の信念もグ

ラ付かざるを得ぬ。土饅頭は誰があげたかわからぬもの、それを戴いて付けるのだから、全く不思議だ。まさか笠森の字や附近の土には硼酸が混じてゐるわけでもなからう。繪馬の様式は別に變つてゐない。俗に見る神前で祈つてゐる姿を描いたもの、少々は牛を描いたものもある「クサを喰ふ」洒落だらう。

こ記されてあるが、今では拜殿の前には僅に數枚の繪馬(前號カット参照)がかかつてゐるばかりで、寧ろ拜殿の横

手に澤山な繪馬がかかつてゐる。それも雨露にさらされて、繪が殆んど消えかけてゐる。

今井卯木氏の「川柳江戸砂子」から土團子の句を五つ六つ拾つて見やう。

人として稻荷をだます土團子

土團子虚病と見える買手あり

笠森へなんで行きやると苦勞からだ中擡き／＼値切る土團子

人間の御難は土の團子なり

推量のわるさにきびに土團子

いづれも江戸の笠森の土團子を詠んだものではあるがきつい諷刺句である。

江戸の笠森の土團子が勸果一〇〇パーセントであつたこ

こは前掲の句の裏から推知するに難くないが、本家の笠の森稻荷の土團子ミ土質が同じであつたか、さうか科學的な

分析をして見ない限りなんとも云へぬが、それよりも信仰の力を神がうけ容れられたものさを見るのがホントであらう

前句の奉納額

笠森稻荷社の拜殿の内部に「奉納前句三千餘句」(車篇は判るが、つくりはハツキリせぬ)ミした前句附の奉納額がかかつてゐるが、古び減損ミで、額面過半の文字は讀下せない。數時間を費してやうやく、それが播州龍野？(この野？の字も辛じて判斷し得る程度)の□□社？の十洲評であること、前句の題は春の曙／＼秋の夕昏／＼誠なり鳥／＼昔も今も／＼



協・川

★百人撰發表は繰延べ

★本協會の年中行事「日本柳壇百人撰」川維二月號誌上へ發表の豫定であつたが、同情週間川柳大會入選句發表と殆んど同時になるので本年度からは四月號發表に變更することとした。御諒承の上御支援ありたい。

★静岡大火と川柳人

静岡の大火は近來の大慘事で静岡川柳人も多數罹災の模様であるが確報を得られないので次號で詳細をお知らせしたい。本協會としては取りあへず本協會名譽會員榎田竹林氏宛にお見舞の電報を打電すると共に見舞金を募ることとした。(表紙の二「静岡大火に際し川柳人への御見舞金を募る」の記事参照)

▼廿九日朝六時五十分ごろ大阪西成線大阪驛同六時四十分發櫻島驛行三輛仕立のガソリンカーが乗客約五百名を満載して此花區川岸町安治川口驛に差ししか

若き社員を募る

り送おを書歴履づ先は方の望希御すましたい知通を日會面いさ下(部編輯・部業務)

社誌難柳川

つた際最後の連結車が外れて脱線、火を發して死傷者二百餘名を出した工場街のラッシュ時のことと大混雑を極め現場は慘憺たる有様である。同方面通勤川柳人も多數あることと目下取調中である。

川維・案内

六號活字十四字詰三行とに金十錢(但し前金改切手代用可)句會案内柳書廣告その他

柳川しなの

一部拾五錢 一年一圓八十錢 松本市大名町 しの川柳社

京 一部十錢 一年一圓(稅共) 京都市御幸町松原上ル 發行所 京都川柳社

東海の 代表誌 一部一〇錢 一年一圓(郵稅共) 名古屋市南區八熊町寺田 發行所 草薙川柳社

川柳きやり 菊版每號六十數頁 毎月一日發行 一部廿五錢 東京豊島區高田町二ノ四 八八 川柳きやり吟社

柳川伊豫 一部拾錢 一年一圓廿錢 松山市南柳井町五九 愛媛川柳社

川柳 月刊 一部十五錢 一年一圓五十錢 青森縣黒石町川柳みちのく社

川柳大陸 一部二十六錢 一ケ年三圓 大連市仲町九 川柳大陸社

春聯 一部二十錢 一年二圓(稅共) 大連市薩摩町一六森崎方 春聯川柳社

柳友 一部拾五錢 一年一圓八十錢 東京市杉並區和泉町八四 柳友會發行所

等々々であること、附句で完全に読み下せるのは、誠に哀しいの題に

笠の膳しても夫トの好きなもの

位なものである。

作者の號の前半は非常にハッキリしてゐるから左の如く寫し置いた。

指柳、只人、風試、東花、桂花、東花、蘆笛、小吟子、一醉、赤帶、青雫、青口、赤士桂葉、桂花、青雫、蘆夕、其源、百助、葛蘆、煙土、龍州

後半の句主は一切磨損してゐて不明である。

最後に寛政八年丙辰仲冬の文字ミ別行に西播磨の文字を讀むことが出来る。これ等の句主が西播磨に於ける寛政年間の作家なのであらう。

寛政八年丙辰云々柳樽廿六編及び古今前句集の刊行された年で、初代川柳(寛政二年戌年歿、行年七十三)が亡くなつてから七年目である。試みに柳樽の廿六編ミ廿七編(寛政十年刊行)の頁(内陣に掲げられた前句奉納額)

を繰つて見たが如上の雅號を持つ句主は一人ミして見當らない。

祭禮のこと

笠の森さんの祭禮は前號でも述べたやうに舊曆七月十四日から四日間行はれるやうであるが一般的參詣者の賑ひミ云ふものは無いらしい。

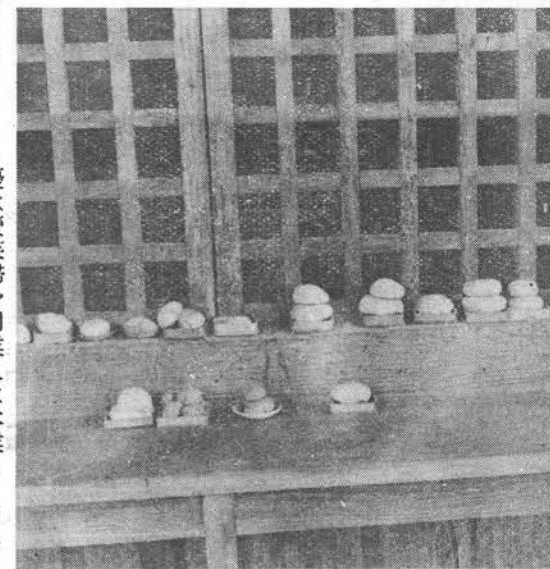
十二月一日にはお火焚の神事を執行する。この時には附近にある十五軒の家々から藁二束づつを持寄つて焚くやうである

毒蔓延の素因

笠森稻荷が轉訛して瘡守稻荷ミなつて、遂には毒蔓延の神話にされてしまつたのは前號でも述べたやうに、元祿の頃から江戸では非常に毒蔓延したからである。

人間の心の弱さは、笠ミ瘡

伎の女優が病毒の傳播に主要な役割を演じたことは疑ふことが出来ない。女歌舞伎の開祖である出雲のお國は賣笑婦ではなかつたが、その一座の女優や、その後に出雲した女



子國土の前社社荷稻森笠

優は賣笑婦を副業又は本業としたもので、京洛の外諸國に於ても到るころで大いにもてはやされ、宴席の招きにも應ずれば、肉をも賣つたのである。慶長十二年に、三十七歳の壯齡で卒去した結城秀康の如きは女歌舞伎に耽溺して

毒蔓延に侵かされ、それが主因ミなつて世を去つたのである。女歌舞伎の女優がいかにか甚しい害毒を流布したかは、「京童」の、

此所にも戯れ女の舞ひしに皆六根を悩まし、心を六塵に溶かし、費をなげうち、あるは子持の養をも顧みず、あるは子持が格氣をも壓はす、くる日もこぬ日心はここに置き置き錢箱をたたく。限りある寶に盡きなき戯を好み、親を忍び妻をはかれども、あこぎが浦にひく網の、目も繁ければ露はるる」

長云へば慶長の頃から流行した女歌舞

であらう。

ここに寛永年代に至つては女歌舞伎はますます流行し、上方から陸續として女優が東下し、風紀を紊亂するこころに達したので遂に寛永六年に幕府は女歌舞伎を厳禁したが、その禁止後も公娼や私娼の繁昌するにつれて、いよ

／＼毒蔓延は甚しくなり萬治のころには遊女の色香に迷つて不具癡疾の身ミなつたものも多數に出て、これ等の病毒の媒介は花柳の巷に選

つてしまつたのである。斯くの如き状態が瘡守稻荷を繁昌させずにはおかなかつたのである。

笠森お仙

最後に、前號で引例した「寛天見聞記」中にある、谷中天王寺門前の水茶屋、鍵屋五兵衛の娘お仙のこころを少し述べて本稿の結びミしよう。

笠森お仙は寶曆二年の生れで少女時代から水茶屋、鍵屋の茶汲女ミして店先にその姿をあらはし、天性の美貌が嬌名を天下に誦はれ、鈴木春信の錦繪で宣傳され、演劇に有名になりすぎたために、かへ

つて浮いた話はなかつたらしく、十九の時に幕府のお庭番倉地政之助に嫁し、文政十年正月廿九日に歿した。墓は東京市中野區打越町八二八番地に現存するやうである。(終)

柳界展望

全柳川界の柳界展望を信通御の御覧にいたしに候

催(豫告)

川柳雜誌社二月十日御津八幡宮 兼題「船長」「豆炭」兼題「買溜め」「火事」「涙」松坂俱樂部(二月四日)兼題「誕生日」「女社長」

消息

橋本緑雨君(不朽洞會員)は大津陸軍病院に酒井美知夫君を訪ねられた。

田中辰二君(熊本)昨夏文部省から内地研究員を命ぜられ数ヶ月上京されてゐたが舊臘歸任後引つゞき精神科學獎勵金を得て近世文化方面の研究を續けてゐられるとのこと。

橋本波夢造君(不朽洞會員)は目下東京市戸塚町小川病院へ入院加療されてゐる。

北山悟郎君(不朽洞會員)の令息明君が入營され、某日〇〇の令兄が出發された。悟郎君の句に曰く「一門の代表元氣良く征けり」

植山九天君(長崎)は一月十三日上海の華中鐵道から長崎案内所開設のため同地に轉勤せられた。

在布哇の高澤一浪君(不朽洞會員)は川柳普及のため日布時事新聞紙上へ懸賞募集川柳「笑」の選句を發表された。

宮尾しげを君等によつて「ほづき」の更生その一が東京市京橋區筑地ノ十ほづき社から

刊行。森雞牛子君の「三味線草」が一月號から「川柳春秋」と改題された。

長崎柳秀博士から「實驗治療」第二(六號)の抜刷「第六感の話」の寄贈をうけた。

九尾潮花君(不朽洞會員)は來る二月四日(節分)に結婚式を挙げられた。

小川百雷君(大阪)の御令嗣は十二月廿八日紀代子さんを儲けられた。

澤松異天樓君(愛媛縣大洲町)が一月八日急逝された。行年三十一歳、「近作柳柳」欄の新進作家として大いに矚目されてゐた。君は早稲田大學英文科出身の松山海南新聞記者であつた。

正木柳建寺君(京城)は鯨左衛門を福左衛門に改號された。

支部及び幹事の異動
北大阪支部を豊中支部と改稱
港支部を解消し、華櫻支部(大阪)を新設、幹事は多田一

波君上海支部幹事植山九天君が擔任
左記の諸君が不朽洞會に入會された

西宮 布施 筑川君
大阪 尾崎 方正君
兵庫 小崎 附子君
大阪 佐竹 附子君
同 押谷 附子君
同 關根 山彦君
大阪府 西尾 栗君





川柳塔

路郎選

大阪奥村丹路

北風へ酒の約束果しに來
醉眼にやはり巨大なビルディング
ほんごうの歳いつはらず定期券
お役人の女房さしても炭さ米
北風へ瘦身泳ぐが如く行く
正直にすぎて炭屋を呆れさせ
他人目には幸福さうに子を抱き

墨家口 岩崎柳路

ホットケーキの蜜の甘さへ日本髪
猫の毛皮犬の毛皮も御時世か
貧乏はみな白系にされてゐる
蒙疆で笑われてゐる京言葉
行商の掛値へ妻の怒るこゝ

兵庫縣 寺井銳々

金の事に觸れず友達歸國する
金借りに來て晝飯も食つて行き
マスクちこ笑つた事を眼に見せる
炭がなし水不足よりはましかな
百圓の剩錢を突込む茶葉服
停電日八階籠城のやうにゐる

ハワイ 高澤一浪

敵の多いこゝも男として誇り
眼帯であなたまかせの丸木橋
首つたけ客扱ひをよせと言ふ
けちんほのこゝが女にすかれたり
働かぬ指は自慢にならぬ指

悪友に手ぬるい戀を笑れた

片膝の姿女さ云ふ姿

信號は青だ首途のよい戀だ

サレビスさ知つても男たる弱み

恙なく脂肪過多症マダム病む

残念であつたであらう戀敵

時局論交へる香具師は賣れてゐる

衣飾つてみてもさうにもならぬ鼻

アスファルト風は無残に引きづられ

神詣すましてからのうるさ型

お経なきおほえはじめて焼け出され

退職に園藝の本釣りの本

別邸に訪へば社長のよく話し

切符制裏にうごめくプレミアム

正直でるれば燐寸も炭もなし

畝傍山國の譽も榮えゆく

默禱に東の空はちこ赤し

戦ひはこれからか月給このまんま

朗かな春ではないが暖し

大阪 橋本緑雨

故郷から送米

米置き場に困る家に住み

飯台の置手紙風呂へ行つたこゝ

ヒラ／＼新貨賽銭箱をそれ

京極の吹雪へふたりちぢこまり

豆炭を無口ほつ／＼くづしかけ

叱られる二人は椅子を浅くかけ

しつかりミハンドバックを抱いてこけ

二階まで逃げて女は泣き崩れ

だまされたまんまの部屋に風もなし

だまされた空はあくまで青いの

信號の青は見越した牛車にて

銃後には團服の要るこゝだつけ

大阪 丸尾潮花

大阪 岩橋双虎

大阪 橋本緑雨

大阪 丸尾潮花

大阪 岩橋双虎

あ、つひに瘦せたるまんま三十五

僕は、僕は、僕は、がさ異論出る

泡盛の白くそれ見ろ立てまいが

さは云へさ金が嫌ひなわけでなし

ナンバーリングの如く日が経つ

不遇な人の靴の片べり

まああがれあがれさ春をきてらで居

ほろ口へのつくりお茶を飲んで出る

大火鉢代書薄日へ頬を向け

着こなしもきれいに娘オールスフ

音もなく集金屋來たスフの靴

木枯へ親子かぬくめ合ふ雀

債券へまだ／＼慾な老眼鏡

元日の出勤のつくり齒をみがき

初春のくらしの煙が雲に溶け

三ヶ日すんで鰯を焼くにはひ

尿瓶の泡に冷たい冬を知る

丸刈の醫長書生つぽい口を利き

冥想の机へ猫がゐるてくれる

大阪 岡田某人

轉宅をして航空燈に氣付き

夢多き男が今日も樂器抱く

猿の瞳にも金あるひさ、見えぬなり

大晦日のひさ、きを居る喫茶室

マスクして僧北風の中へ出る

地下鐵の寒暖計を見る寒さ

チウインガム大事な台詞聞き落し

参道の遠さが二人には樂し

満員車男おるさで乗つて來る

盛装の女の息も白き午後

タツクル同志眼のするささを疑はず

再婚の話に梅は白ろく咲き

珠數ふさきれて一つ／＼の行衛

念佛のほかはホトケが逃けてゐる

兵庫縣 水谷鮎美

兵庫縣 水谷鮎美

兵庫縣 水谷鮎美

兵庫縣 水谷鮎美

おもしろきもの、うちなりお手がなり
子の本を読んで正月らしき夜
感激の握手に震する日なり

新年風景(二句)

大阪 姫田 夕鐘

着飾つて口繪におくれさるまいぞ
瓦斯タンクがべちやんこになつてゐるお元日

水谷光男君へ

飲んでゐる横で繪本の虫となり
統制がこたへてまんね同士飲み
買ひ溜ぢやない明日のお米を買ひに行く
金賣つた當然のこゝへ感謝状
生めよ殖せよ雙生児が産れちぎ慌て
老境への一步か針に通らない
むかしにかへれ味の素をけなす母
プレゼント戀の科目の一ページ
父のカメラへ冬の河原で立たされる

大和路

名古屋 吉田 水車

よく續く天氣をほめて春の旅
雪降れば雪に糧する人もあり

祝高知柳壇

二千六百回御代の榮えさもろ共に

募集句

一路集



建國祭 五健選

日の丸を仰ぎ二世も建國祭 愛鳩
默禱に臉にうかぶ建國祭 みづほ
奉仕した聖地で今日は建國祭 破衣
建國祭昔のまゝの土の色 同
建國祭記念事業の鉄初め 市多樓
建國祭神國の幸身に感じ 青風

ふち無し眼鏡が似合ふあね藝者
桃割れが三人行けば春めいて
電文に托す言葉もなかりけり

大阪 妹尾 八九満

丸帯が嫌ひではなし女中さん
柿赤し名譽の家に柿赤し
軍事便近所の人が集まつた
手内職その鼻先で慰問文
節電云ふ満員へ子を背負ひ
百貨店金のないのは俺一人
せめてもの奉公電燈一ツ消す

南支 宮岡 白峯

薬にねて今日は晦日だ元旦だ
姑娘の顔にも春の風があり
支那の街つかれし春の風に似る
人形紙に國婦の慰問品
軍刀の使ひ初めやミ部隊長

大阪 正本 水客

銀の壺おもき光りのなかにあり
伸びる丈けのびて一本杉寒し
方言で女中なか／＼負けてゐるす

北風へまつすぐに出る建國祭 久枝
建國祭楠公さんへ丘つゞく 斗風
建國祭みんな敵傍の方を向き 春巢
大空に建國祭の氣も澄めり 朗舟
建國祭八紘一字文武不岐 曉明
建國祭大成期して店開き 文庫
建國祭歴史に強く美しい 小雅子
眉昂げて建國祭の街をゆく 九坡
日本の眞顔を見せて建國祭 白鷗
聖戰の最中建國祭は湧く 彌生
(五)灯台に日の丸を見る建國祭 斗風
(五)建國祭雪も少し降つてよし 水客
(五)建國祭表彰状を軽く巻き 風葉

魚串 八九満選

魚串の用意もあつて釣が好き
釣つて来て妻と笑うて串でやく
魚串の土産で歸る姉藝者

普天 破衣 青風

魚串を裏返してから口をきり
ゆく秋に魚串けづる日曜日
名物と言ふ魚串のまゝで出し
魚串の稼いだ高が侮れず
馴れたものスツト魚串さゝれたり
不器用をかくし切れない魚串
魚串へ並ぶ獲物を妻笑ひ
魚串片手にどじやう逃がしたり
魚串の足らぬ分だけ網でやき
魚串へねずみが一寸顔出した
家計簿の豫算を過ぎた魚串
魚串朝から芽出度い物をやく
(軸)たまらない匂ひになつた魚串

久枝 斗風 春巢 曉明 同 洋平 富士 同 巨入 同 八九満

スフですご破れたタオル貸して呉れ
土佐龍華洞

洞窟は幾萬年云ふしごま
焼海苔のしめりは朝の悔ひに似る
わかさがれ焼く手二號して老ける
足袋を穿く女は斜すにものを云ひ
残り福妓は賽銭別に投げ
戎さんの渦に逢曳たゞ歩き
感違ひ空巢を叩頭して歸し
人を呼ぶ聲で舞台は明かなり
神様を今度はだます嘘になり
サンド・スキーの寫眞が出てゐる温泉場
姉妹冬のスキーは常識よ

豊中 黒川 紫香

停年で貰ふお金の珠をはね
寒蟬の生きる努力をいさほしむ
箸紙が讀めて達者な子が並び
手圍で戀の便りが書かれたり
君さ僕酒の強さが違ふ丈け
廣告で壁が出来てる宣傳部
コーヒ丈けおごり主任云ふ名なり



同舟近詠

根山 前田 五健

番付に變哲もない双葉山
やめられぬ弱さよ水に酒混り

米の飯ついて廻つた昔あり

お遍路のあて何番で花見ます

別荘で何んの彼んのこ時局論

龍天に昇る下界は福壽艸

松竹の裾濱の砂山の土

金澤 安川久留美

棄てきれぬ物がたまつた納屋の内

魚屋は蠅を庖丁で追ひ散し

執達吏心こちがう聲も出し

脚幅の揃う夫婦は毛唐めき

コスモスへ看護婦さんの好きな唄

朝霧に櫓をこぐ音も春の河

叱るだけ吐り半さん御退廳

今治 長野文庫

定期参買つたも知らず辭令下り

フランス語なきを使つたラブレター

決心がつき歩き方まで變り

酒の味さうのここのさ未だ若し

怒つてゐるらしい藝者が藝を見せ

統制で鍼力屋此頃靜かなり

人間の聊か出過ぎ板ばさみ

コソ泥の一つ叩かれ恐れ入り

無爲徒食その癖よくも肩が凝り

廣島 濱田久米雄

聖戦下買溜めを聞き嘘を聞き

プチブルの悲鳴二面の隅を借り

心臓を強くする氣のお元旦

最善を盡せと訓示云ふて降り

大晦日子の守をして氣が疲れ

少々の負債もあつて花をわけ

神戸 潮田明坊



筋ト一柳川 月評

人銃・鈍亜・巢春・人某・郎路

路郎「今夜は春巢君からお願ひませう。」

春巢提出「近作柳樽」

十二月アレグロになる人の足

西尾みづほ

春巢「面白い觀察だと思ひました。忙しい足音が聞えてくる様な氣がします。眼の悪い者には（近視五度の眼鏡を光らす）聴覚の事では餘計にピンと來ます。」

某人「アレグロとは快速調ですか、どんな譯がつきます？」

容の豊さがなく、至極通俗的な句になつてしまふ。大體歩調の表現の仕方によつて、特殊な人物も出るし、感じも出て來るものだと思ふ。

この句の場合、作者が單にアレグロといふ文字に興味を持つただけで作句したと云ふのは、いささか酷な觀方で、アレグロと云ふ音楽用語を使用する以上例へ作者が音楽家でないにしても少なくとも、レコード音楽やラヂオの洋樂放送に趣味を持つてゐるものと解さなければならぬ。そしてこの文字から感受せしめられる調子の面白さと、或る種の人間を描出してゐると云ふことは云ひ得られる。その點でこの句の面白味が受けとれやう。

某人「結局そうすると僕の句の方は、アレグロと云ふ言葉を知らないものゝ句ですな。」

路郎「まあ、そうだね。用語の使ひ方で人物が限定される譯で、單に文字の面白さからでは推奨するには足らないと思ふ。」

亞鈍「アレグロで人物を限定してゐると云ふのはどう云ふ意味ですか、一般の通行人とはとらないのですか？」

路郎「勿論、そうはとらない十二月に足が早くなると云ふことは一般的ではあるが、アレグロといふ文字ではあらはす人々の場合を想像する時、少くとも老人や子供の表現ではない。人物を特種の階級の人と觀たいのである。一般の意味なれば追つかける方の方が適切な表現となるわけである。アレグロといふ文字を使つてゐる以上は音楽的な觀方、新し味を持つたクラスと觀たい。」

某人「このク人の足は十二月の人の足の忙しさを表はしたい時に、音楽語のアレグロを用ひたと解釋したんですが、その人々の足をアレグロによつて或るクラスの人々と觀るのと、單に一般の人々と觀るのととの二つに分れるが、然しアレグロの文字を使つてゐるので、そう云ふクラスの人と解釋したんですね。」

亞鈍「アレグロは速度のテンポであつて、性格的なものが見えない、そこに某人君が引掛つた處でせう。先生は好意的に觀たので、僕等は一寸……。」

某人「そう、冷たいんだな。亞鈍「作者が句に新味を持たせるためにアレグロを用ひたと思ふのは、この作者の他の句にはそんな言葉を使つてゐない點からです。」

某人「十二月とは一寸古い感じを持つ。」

亞鈍「いや、日本語としては師走や年の暮などより新しいね」

某人「文字が古いのではない心理的に古く感じる、十二月と來てアレグロとくるところ……。」

亞鈍「先生の特種の人とは洋裝の若い人達を云ふのですか？」

路郎「そう、少くとも歩調にリズムを意識する階級ですな。」

春巢「風來子氏のクハイヒールへ追ひつかなかつた十二月と同じ様な意味ですが、感じは違ひますな。」

路郎「ハイヒールの方には寒さが出てゐますな。忙しさより寒さを強く感じさせられる。」

某人「この句の方がハッキリ來るのは具體的だからですね。」

亞鈍「アレグロと持つて來た處で明瞭性が出てゐる。」

某人提出「近作柳樽」

父親の頑固へ娘美しい

大平 幸路

某人「別に新し味は無いと云

へば無い様なものゝ、一つの纏つた情景なり世界なりを表してゐて好いと思ひました。多少拵へた様な感じもするが、この句はこれなりに差支へないと思ふ。」

亞鈍「昔好きな娘さんがあつて（笑聲）綺麗には違ひないが（ドット笑聲、某人、水々と叫ぶ）その父さんが鬼瓦みたいな人で矢張り頑固だつたと思ふ。美しい娘を持つた父親は兎角頑固に見える。」

某人「父親が頑固だから娘が美しいと、娘が美しいから父親が頑固に見えるのと兩方だね。」

路郎「この句の力點は、娘が美しいより父親の頑固にある様にとれるが、慾を云へばどんなに美しいかを表してほしい。」

某人「この句は一般的な美しさですな。」

路郎提出「近作柳樽」

俺の伯父バライサイ人に似て貸さず

笠原路生

路郎「この句については聖書に詳しい亞鈍君に一つ……。」

亞鈍「（苦笑しながら）金光さんへ轉向したんでね。私もこの句はチェックしてたのですよ。」

某人「バライサイ人とは？」

路郎「古ユダヤ族の一つだ。彼等は儀禮や因襲を固執し、さういふ思想を神聖視する人々で又器物を禮拜する人間で、人間よりも教會や本などを尊いと信ずる人達だ。ユダヤ人の拜金主義がこの頃のバライサイ人に根指してゐることが想像される。」

某人「バライサイ人を持つて來たのはアレグロと云ふは亦違つた感じがする。伯父でありながら全然水臭いですが、外國人の人種を持つて來たんで、その効果餘計に感じる。」

路郎「まあ、貸して呉れないのをバライサイ人で強調したわけ、從來のくだけた伯父をこれ

風の空見上げて借りを忘れたり
夕刊を賣る子に注連の内の雪
支店詰め淋しい方へ乗り換へる
常識が百圓札にうさすぎる
ヌーボーな男の妻が美しい
散髪の順をゆづつて時局談
額なごも變へて今年こそ意氣
禁煙に非ずタバコが無いのです
愛犬は節米なごさ知らずして

愛媛縣大洲町

今川 柳影

漫 畫 陣 中 鏡

北 支 中

○月△△日
不覺にも意外な
側方からバリ
／＼たたかれた
利用すべき地物
もない。
土に顔をバツタ
リミつけて、ス
ルメの如く伸び
てゐる、隣の
戦友が、
クオーイ、これ
が本當の土と兵
隊だナア……
このユーモアに
思はず二人は顔
を見合せて笑つ
てしまつた。
生死を超越した
笑ひだ。



家貧にしていろは壁にあり

阿部内閣總辭職

阿部さんは買溜なごも恨んでみ

米内閣成立

一億の歡呼へ自信の帆を上げて

米内丸コース誤るこさ勿れ

あるごきは妻の仕草も眼に憎し

下關 多田市多樓

眞心を知らぬ返事はあつけなし

齒ブラシのチビ元旦の朝に知り

人の世の最後は淋し紙幟

人の世の最後は淋し紙幟

で打破する。そこにこの句の穿
ちがある。

亞鈍||それで俺の感じも
パリサイ人の言葉からくるいま
／＼さがよく感じられる。(笑
聲)

路郎||同じ作者のクバイブル
を讀む娘の不仕合等はずッカ
リ古句の調子であるがバイブル
を持つて來ても少しも不調和で
はないところがいい。

亞鈍提出||川柳塔

二千六百年昨日の姿そのまん
ま 麻生 霞乃

亞鈍||何も用意してなかつた
のですが、この句が眼に寫つた
から提出する。これは二千六百
年奥さんの姿そのまんまですな
某入||そや。

亞鈍||提出句はそれとして後
の三句にも云ひたい事があるの
ですが、奥さんの句は詩的だと
か云つて一部の人の評判を買
つてゐますが、然し、正直な處
この句はいゝと思つた句はない
句として詩的であり過ぎる處に
僕の買へない點がある。これで
も川柳だと云へばそれまでです
が本筋の川柳と云ふ點からこの
句はいゝ川柳だとは思はない。

で川柳を批評する場合には詩的
なもの、高度なものを狙つてゐ
るからと云つて、それが強ち好
い川柳だとは思へない。某入君
どう思ふ。

某入||それは賛成。君の云ふ
事は判る。

亞鈍||例へば櫻貝を濱へ撒
いて行つた人魚よ人魚よこれ
なんか女學生なんかの抒情詩の
一齣。／＼藥屋根へ雪と降れ／＼
冬の星も童謡詩の一齣だね。

某入||つまり、例へば川柳の
目指してゐるものは飽くまでも
煮た物又は焼いた物の味、奥さ
んの句は刺身の感じですね。勿

論刺身でも山葵の利いた——刺
身として獨立する場合があるけ
れど、往々にしてつまの美しさ
であつて料理としての本筋に
のせる上に或はどうかと思はれ
る場合が出てくる。これは奥さ
んだけの事でなしに一般に所謂
詩的な句を作らうとする一つの
異じやないかと思ふ。大體川柳
の味はどちらかと云ふと世帯じ
みた方へ傾いてゐて、つまり味
付け——副食の——そう云ふ
感じが川柳味として現在まで貫
いてゐるものじやないかと思ふ
だからそれ一方に偏してしまつ
ても「もつ」だけのえげつないも
のになつてしまふし、だからと
云つて賣たまゝでは飯の菜にな
らぬ。結局亞鈍君の云はうとす
るのはそこじやないか、あまり
例へがやゝこじかつたけれど。

亞鈍||例へ過ぎる(笑聲)僕が
亦君の氣持を言はなければなら
なくなる。

某入||これも水が要る方か。
路郎||愚妻の句だからハツキ
リ喋るのはどうかと思ふが、四
句の中で二千六百年は性格
がよく出てゐる。あとの三句は
其性格が持つてゐる夢である。
で一方で非常に夢を持つてゐる
から移り氣かと思ふと二千六百
年が二千七百年になつても昨日
の姿其まんまである。台所道具
にしても新しい物が生れて、よ
り便利であり、より經濟的であ
つても、その方へ容易に移らな
い性格を持つてゐる。其性格を
丸出しにした句である。大晦日
も元旦もない人間で、世間の奥
様と比較すれば世帯人ではない。
某入||初めの句は川柳塔で、
後の句は貝卸ですね。僕ならそ
うしますね。

亞鈍||某入君だつたらそうす
るが、奥さんではそれが出來な
い。それ丈正直なんで、君の方

が人が悪いと云ふ處だ。夢を持
つてゐる、一家の主婦は珍らし
いと思ふ。その夢も單なる夢で
理想だとか、希望の夢でなしに
他愛ない夢、詩では純粹性です
表現の仕方が、餘り本能的だと
思ふ。自然發生的ですな。表現
そのものの自然發生を破る態度
に出るのが、川柳詩人の考へ方
じやないかと思ふのです。

路郎||そう思ふね。霞乃は川
柳に入つて三十餘年間、初めの
半分は所謂川柳を作つた。その
間に於て僕が詩としての川柳、
川柳の詩的分野を開拓した時に
愚妻はそれは川柳ではないと反
對したその後(十幾年前)それ
を認めると同時に所謂詩的川柳
を作句しはじめた。詩的と云つ
ても純粹とか夢とかでなしに川
柳としての特殊性な川柳、詩的
境地へ進んだ。その方へある程
度まで進んだが、だん／＼特殊
性が稀薄になつたのが今の境地
で、もう一步川柳的に苦しまば
別な世界が生れると思ふ。と云
ふのは過去の川柳の川柳を識
つてゐるからである。

亞鈍||その氣持はそれでいゝ
として、もつと知性的なものを
持つて貰ひたい。文學少女の抒
情詩や童謡でなしに。先生が詩
的な川柳を作られた時の句の二
三をあげて呉れませんか。

路郎||それはまあ、君見給
へ蒨葦草が伸びてゐる／＼ヤク
ヤクとんぼ返りがして見たし／＼
なんかその例になるんだらうね
大體以前僕は「雪」や「土圍子」時
代の句では色々詩的の中に川柳
味を出そうとして、句の中でも
多少違つた行き方に努力したつ
もりである。

亞鈍||「はうれん草」や「ヤク
ヤク」の句は人口に膾炙されてゐ
る句で、今更言ふところはない
ですが、生活川柳があつたとし
て、それに對して純粹川柳があ
るとすれば、これこそそうだと
思ひます。僻みや妬み等そう云

つた生活の諸觀念から束縛され
ない、ナイーブを持つ純粹性で
あるのです。

路郎||それが判つてゐて、何
故抜くかと云へば、作者の抱懷
してゐる川柳の廣狹を認容す
るからで私の選句態度もそこか
ら出てゐる。川柳味が稀薄にな
つて、遂には川柳でもない俳句
でもないものを作る人もあるが
その世界でも又同じ惱みが生れ
て來て、また川柳の世界へ戻つ
て來るものである。そう云ふ惱
みを感じないで、どこ迄も川柳
は川柳としての惱みへ突き進ん
で貰ひたい。それで私は人によ
つてはせきとめ、人によつては
押出す方針を採つてゐる。

某入||せきとめても熱情があ
れば、矢張り出て行く、そう云
ふ人が今は少いんじゃないです
か。

路郎||そう云ふ人が出てほし
い。そうすれば新しい川柳の世
界が生れるんじゃないかと思ふ。

亞鈍||川柳家は早く固まる人
が多いですな。

路郎||川柳は早判りがするの
で與し易いと思ふ點で、すぐ型
が出来るのである。

亞鈍||僕の提出句の方へ戻り
ますが最近二千六百年と云ふ言
葉を多く使つてゐるが、二千六
百年を「こころ云ふ風な句でグ
ラツと變つたものにした點を愉
快に思ひます。

路郎||先日、ある會で「二
千六百年」の題で選をしましたが、
大體力々二千六百年は拙い題で
二千六百年も二千七百年も同じ
事で、特異な個みどころがないか
ら作り難い。銀婚式や金婚式等
はハツキリ區別できるが、こん
な焦點のボケた題で佳句が生れ
る筈がない。例へ出來てもこち
つけである。その意味から云へ
ばこの「二千六百年」の句は成
功してゐる方だ。(鏡入筆記)

路郎||僕も、ある會で「二
千六百年」の題で選をしましたが、
大體力々二千六百年は拙い題で
二千六百年も二千七百年も同じ
事で、特異な個みどころがないか
ら作り難い。銀婚式や金婚式等
はハツキリ區別できるが、こん
な焦點のボケた題で佳句が生れ
る筈がない。例へ出來てもこち
つけである。その意味から云へ
ばこの「二千六百年」の句は成
功してゐる方だ。(鏡入筆記)

路郎||僕も、ある會で「二
千六百年」の題で選をしましたが、
大體力々二千六百年は拙い題で
二千六百年も二千七百年も同じ
事で、特異な個みどころがないか
ら作り難い。銀婚式や金婚式等
はハツキリ區別できるが、こん
な焦點のボケた題で佳句が生れ
る筈がない。例へ出來てもこち
つけである。その意味から云へ
ばこの「二千六百年」の句は成
功してゐる方だ。(鏡入筆記)

路郎||僕も、ある會で「二
千六百年」の題で選をしましたが、
大體力々二千六百年は拙い題で
二千六百年も二千七百年も同じ
事で、特異な個みどころがないか
ら作り難い。銀婚式や金婚式等
はハツキリ區別できるが、こん
な焦點のボケた題で佳句が生れ
る筈がない。例へ出來てもこち
つけである。その意味から云へ
ばこの「二千六百年」の句は成
功してゐる方だ。(鏡入筆記)

路郎||僕も、ある會で「二
千六百年」の題で選をしましたが、
大體力々二千六百年は拙い題で
二千六百年も二千七百年も同じ
事で、特異な個みどころがないか
ら作り難い。銀婚式や金婚式等
はハツキリ區別できるが、こん
な焦點のボケた題で佳句が生れ
る筈がない。例へ出來てもこち
つけである。その意味から云へ
ばこの「二千六百年」の句は成
功してゐる方だ。(鏡入筆記)

路郎||僕も、ある會で「二
千六百年」の題で選をしましたが、
大體力々二千六百年は拙い題で
二千六百年も二千七百年も同じ
事で、特異な個みどころがないか
ら作り難い。銀婚式や金婚式等
はハツキリ區別できるが、こん
な焦點のボケた題で佳句が生れ
る筈がない。例へ出來てもこち
つけである。その意味から云へ
ばこの「二千六百年」の句は成
功してゐる方だ。(鏡入筆記)

路郎||僕も、ある會で「二
千六百年」の題で選をしましたが、
大體力々二千六百年は拙い題で
二千六百年も二千七百年も同じ
事で、特異な個みどころがないか
ら作り難い。銀婚式や金婚式等
はハツキリ區別できるが、こん
な焦點のボケた題で佳句が生れ
る筈がない。例へ出來てもこち
つけである。その意味から云へ
ばこの「二千六百年」の句は成
功してゐる方だ。(鏡入筆記)

路郎||僕も、ある會で「二
千六百年」の題で選をしましたが、
大體力々二千六百年は拙い題で
二千六百年も二千七百年も同じ
事で、特異な個みどころがないか
ら作り難い。銀婚式や金婚式等
はハツキリ區別できるが、こん
な焦點のボケた題で佳句が生れ
る筈がない。例へ出來てもこち
つけである。その意味から云へ
ばこの「二千六百年」の句は成
功してゐる方だ。(鏡入筆記)

路郎||僕も、ある會で「二
千六百年」の題で選をしましたが、
大體力々二千六百年は拙い題で
二千六百年も二千七百年も同じ
事で、特異な個みどころがないか
ら作り難い。銀婚式や金婚式等
はハツキリ區別できるが、こん
な焦點のボケた題で佳句が生れ
る筈がない。例へ出來てもこち
つけである。その意味から云へ
ばこの「二千六百年」の句は成
功してゐる方だ。(鏡入筆記)

路郎||僕も、ある會で「二
千六百年」の題で選をしましたが、
大體力々二千六百年は拙い題で
二千六百年も二千七百年も同じ
事で、特異な個みどころがないか
ら作り難い。銀婚式や金婚式等
はハツキリ區別できるが、こん
な焦點のボケた題で佳句が生れ
る筈がない。例へ出來てもこち
つけである。その意味から云へ
ばこの「二千六百年」の句は成
功してゐる方だ。(鏡入筆記)

路郎||僕も、ある會で「二
千六百年」の題で選をしましたが、
大體力々二千六百年は拙い題で
二千六百年も二千七百年も同じ
事で、特異な個みどころがないか
ら作り難い。銀婚式や金婚式等
はハツキリ區別できるが、こん
な焦點のボケた題で佳句が生れ
る筈がない。例へ出來てもこち
つけである。その意味から云へ
ばこの「二千六百年」の句は成
功してゐる方だ。(鏡入筆記)

路郎||僕も、ある會で「二
千六百年」の題で選をしましたが、
大體力々二千六百年は拙い題で
二千六百年も二千七百年も同じ
事で、特異な個みどころがないか
ら作り難い。銀婚式や金婚式等
はハツキリ區別できるが、こん
な焦點のボケた題で佳句が生れ
る筈がない。例へ出來てもこち
つけである。その意味から云へ
ばこの「二千六百年」の句は成
功してゐる方だ。(鏡入筆記)

同情週間川柳大會句報

★天地人五等は前號發表★

兼題

橋本綠雨選

堂島川 石炭舟は沈みそう 富士
石炭の不足を口にして儲け 史朗
石炭の山へ酌婦の泣きに來る 某人
石炭屋得意へすまぬ日が續き 彩泡
石炭の無いストーブを取り圍み 豆秋
石炭車雪をかぶつた朝の驛 亜純
初雪をのせて石炭船が着き 鮎美
陸揚げの石炭こぼれたまゝでよし はるを
石炭の足らぬ寒さへ皆だまり 八九滿

兼題

長崎柳秀選

英靈にすまぬ故郷の土を踏み 双龍子
戦友に泣いて話して氣が晴れる 花戀坊
懸念した僚機雲間の端に見え 銳々
戦友の最後を語る佛の間 角堂
戦友と入れるだけの壕を掘り 千代香
その戦傷でゆけるものかと肩貸し 久吾
戦友の今は女房の兄となり 義人
亡き戦友へこの萬歳が聞かせ度し 五黄子
戦友と社頭で會つて目がうるみ 山雨樓
戦死した模様戦友書いて來る ライト
戦友の手紙の來ない背を見る 某人
傷兵を愛機に乗せて敵の空 夢女
勝つて來た翼戦友にとりまかれ 豆秋
戦友はうすくらがりて手を握り 綠雨
戦友の記事看護婦は嘘を讀み 落丁
戦友にも秘して懷けりブローマイド 筑川
歸つたら戦友飲み來いと言ふ 曉童
戦友と先を爭ふ細梯子 黃波
戦友のくせも涙の種となり 美根子
誰何するときは戦友の聲でなし 萬壽於
戦友の忘れがたみに迎へられ 柳久
戦友は小さい箱で歸つて來 默平

兼題

栗原空栗選

除隊兵一氣に餅を搗き終り 千代香
餅を焼く匂ひ祖國をなつかしむ 古夢想

餅だと思ふ荷札に故郷の字 某人
餅搗きの横をお醫者が通り抜け 紫香
餅配る方も嬉しいスラム街 落丁
皆無事な子の眞中で餅が焼け 某人
歸還した兄も交つて餅が出来 朗々
戦へる夫の分も餅を焼き 梅弟
餅を搗く音は深夜を憚らず 春巢
こけてある餅に氣付いた主婦の友 はるを
かき餅が綺麗に焼けた老夫婦 寄與史
餅ついて今夜の寢床むきをかへ 双葉子
病人をさみしがらせて餅が焼け 春珠

兼題

小川百雷選

人間の慾を神様聞きあきる はるを
神様へソツト野心を打明ける 松太樓
神様に夜が明けたのを教へられ かほる
實印を掃除した日の神詣 水紫
神様を信じ切つて眼が素直 聰夢
神様にまかす氣に成り樂になり 秀峰
神様の鈴・戦線へ響くよう 富士
神棚へきちんと家内中の陳 不川
全快のひとりが神を疑はず 直三洞
神となりし寫眞へ誓ふことがあり 白面人
神様をどうのこうのと云ふ若さ 彩泡
わけもなく神を信じてそれでよし 桂綠

兼題

川出美根子選

誕生日蔭膳の鯛ビンと張り 孤蓬
蔭膳のそばで氣兼ねな女客 新水
蔭膳と聞いて肴屋まけてくれ 万象
蔭膳へ酒もかゝさぬ妻であり 久吾
蔭膳に浮ぶあの日の赤禪 寒々
只管に武運長久影の膳 筑川
蔭膳の寫眞くすぼる長期戦 正路
蔭膳へつめた水を絶やすまい 久米雄
蔭膳へわさびをすつてあげるなり 豆秋
蔭膳へ濟まない筈の火鉢なり 五黄子
蔭膳へ二度目の春が來て淋し 輝翠

兼題

好崎申仙選

勘違ひされてたぐみに話題かへ 千代香

それつきり口をきかない勘違ひ 古夢想
勘違ひ小姑なか／＼／＼／＼／＼ 李介
勘違ひした昂奮の捨てどころ 桂綠
運を逃がしてから知つた勘違ひ 頑童
勘違ひそのまゝ故郷の蒲團を着 某人
生きてゐた嬉しさに泣く勘違ひ 柳笑
三寶のむきが違つた鏡餅 曉童
成る程と話が合はぬ勘違ひ 柳太
勘違ひ鳥打帽を上げて掻き 紅多呂
勘違ひだつた友情の手を握り さいち
勘違ひいつの間にやら三通話 白面人
自問自答獨りうなづく勘違ひ 不川
勘違ひなに言ふてんねと子が笑ひ 艸樂
やゝしばしたつて笑つた勘違ひ 花戀坊

兼題

庄萬よし選

入營の肩の中からはめちぎり 夕鐘
入營はもう大陸を衝くころ 凡路
入營を明日に父親酌いでくれ 春珠
入營をした夜の夢に父母が居る 史朗
入營へ母も覺悟の顔になり 湖秋
入營のものはや我子の隣でなし 春珠
入營へ最後に母が何か云ひ 春巢
入營日母は目だけで送つてゐる 魚鳴
入營は納入期日言ふて出る 白柳子
入營を前に夜業が續くなり 松月
入營の頭のはこりとつてやり 紫津

兼題

河野夜王選

何んぞ切るものはないかと日本刀 源坊
支那兵を斬るには惜しい日本刀 富士
鐵舟のしぶきの中の日本刀 史朗
日本刀持てばおどかす面がまへ 達士
投降の眼には優しい日本刀 黃波
双こばれをそのまゝにして日本刀 久吾
抜く時に抜いて日本刀の牙え 曉童
日本刀まだ切り足らぬように見え 翠葉
あご髭をなでて見つめる日本刀 笑門
生き甲斐のある顔寫す日本刀 龍成
日本刀祖國の難にとがれたり 良志夫
日本刀靜かな月を跳ね返し 須彌浩

席題

寺井銳々選

十二月歩るけば金のいる都會 登志緒
ボスターがはつきり知らす十二月 映像
十二月何がな心空騒なり 柳路
歩いてるつもり走つてゐる十二月 恭平
十二月兎角カナリヤ忘れられ 銃人
福引の籌を使ふ十二月 是るを
十二月河面に見入る人をもみる 葉
十二月振替用紙送つて來 澄風
十二月受付の子は立ちどうし 五遊
全拂ひしても足らない十二月 八九滿
十二月荒い言葉だなどおもひ 小松園
十二月某日耳が聞えない 鮎美

席題

梶文葉選

受付で女同志は長話 絹雨子
英靈へ受付しばし眼をつむり 晴霞
受付に寄附勸進はお断り 藤花
髭のある受付が居て入りにくし 夜王
横柄な奴と受付思へども 双葉子
受付がまばらになつて金を讀み 千葉
編物のまゝ受付の無愛想 水仙
受付の火鉢にあたる出前持 木桃
會議中受付鼻毛抜いてゐる 銃人
受付へ又舞戻る社の廣さ 艸樂
受付の機轉でけふは無事に抜け 水仙
眼鏡越しに見る受付の癖があり 白面人

席題

須崎豆秋選

案山子祭神主うっかり笑はれず 孤蓬
綱引きの勝は子供の方なりき 澄風
降伏に傘さして來る支那の兵 双葉子
マヂノ線巨砲ゆらいだ丈で暮れ 銃人
銅像の様な歩哨に旗がゆれ 寄與史
大砲の口がいきなりこつち向き 青佳
大戦の前夜無氣味に動くなり 聰夢
砲口は不氣味に海へ伸びたまゝ 柳路
發煙にはかゝはりのない月が出る 伯峯
戦の前夜を暗き水と天 曉童
農村の喜びを知る柿たわゝ 白面人
海護る勞苦軍艦旗のいたみ 新兒
(前號の大食記事参照)

理整秋豆 · 郎路

鬼一 向同 素五 向曉 一文 鬼五 曉一 素文 向
外風 上庵 泉健 上庵 童風 庫外 健童 風泉 庫
上庵

産見舞屏風の中をほめて去に
再縁をする氣になつた薄化粧
眞心の看護に何時か夜が白み
眞心のひと針づゝで出来上り
月末の惱みを知らぬ子の軍歌
明日みんな拂ふお金の銀をかけ
飲事の財布へ光る銀があり
光つてゐる金もあるよとの財布
落ちてゐる銀も刑事見逃さず
新入生光る銀にある誇り
取れてゐる銀へふつと秋の風
負けたのが取れた銀を持つて泣き
夜業から戻る吾子へ炭をつぎ
呑む話みんな顔がよみがへり
嘘少しあつて話の面白し
耳打ちへ瞳で受けた妓の若さ
一心坊

蒙疆支部句會 (張家口)

十二月十七日 於柳路居

岩崎柳路報

惡友が言譯して居る新世帯
惡友は惡友だけの良さがあ
惡友と知つてはゐても呑み相
惡友も又なつかしい年になり
惡友は誘ひに來ても門で待ち
銀行の横で惡友待つて居り
支那街で惡友に肩叩かれた
惡友のまだ呑みたらぬ三次會
さはれた下戸惡友になつてや
祝儀、松の内(二月七日)

一割のチップに決めて旅に出る
あつたりと呑んで祝儀が二十圓
慣れた目で女チップを軽く受け
ノリチップ俺は女がきらいなり
御祝儀を胸算用の顔が来る
酔うた友むせうに祝儀出したがり
袂から盃が出た松の内
何はともあれまあ呑み給へ松の内
元旦を機上で拜む操縦士
松の内過ぎて世間の寒いこと
金貸せとも云出しかねる松の内
辛うてもまげはくせぬ松の内

維川 葉櫻支部句會 (大阪)

十二月十六日 於櫻井翠花居

丸尾潮花報

年の暮、アスハルト、
羽子板、雜煮、別れ
仕立屋へ使が走る年の暮
潮花

發展の街が明るいアスハルト
美しい娘が羽子板へ負けつづけ
買物の羽子板だけは子供持ち
蔭膳の雜煮へ兄を思ふ朝
追羽根の音を聞ける雜煮餅
維新餅皆んな達者な箸をとり
應召へ別れの言語リッパすぎ
校庭は別れの歌が聞こえて來
またすくに逢へる口手など握り

阪大川柳句會 (大阪)

一月二十五日 於醫院二階會議室

丸島利生報

貸間、ポケット、代議士
何か干す貸間の縁が暗れてゐる
間貸しする氣で稍々過ぎた家を借
節電もおかし貸間の十燭光
詩集一冊貸間の留守を秋
差當り間貸で暮す後家の吐
貸間して一寸家主の氣にもなり
貸間更けて六法全書めくる音
間貸して年甲斐もない疳を立て
素性などきかれて貸間断はられ
急行の窓から讀めるとこに貸間
間借りして世帯のまねをする二人
ロマンティックな顔で貸間の窓、立
貸間でもさがしてこいと伯父裁き
間を貸した學生さんに物を訊き
手を入れたポケットへ夕刊まじり
ポケットの上から撫でる忘れもの
ポケットを女給にまかせ馴染み振
ポケットから出る楽しみへ子は並
ポケットの勝手が違ふ裏返し

懸賞川柳

課題「帯」二月十日

「淑髮」三月十日

用紙は官製ハガキ(化粧柳壇と明記の事)

選者麻生路郎氏

秀逸數句に謝意を呈す

宛先 堺市出島町三五一番地

不朽洞

★化粧新聞社柳壇へ

ポケットの数が嬉しい新らの服
ポケットにまだ一銭がある紙芝居
ポケットへ両手を入るギャンブル
下りから名士エアーポケットに觸る

腕力でしられて參與官となり
代議士の一年生へベル遅し
代議士になつて斷り樂になり
解散の電報二號へいつち先
今日からは代議士といふ肩のはば
耳がチツと遠く日比谷座の名士
取巻へ代議士といふ巾で下り
代議士の候補金なら出すといふ
國會で小便だけに椅子を立ち
代議士を呼び捨てにして法科に居
大臣は夢代議士の服はあせ
變節もならず代議士うらぶれる
代議士さんも來やると云ふ店で飲
呑み込みを信じ代議士郎を辭す
代議士たらんとしたこゝろ小商ひ
元代議士の羽織袴で來

松坂俱樂部句會 (大阪)

麥飯、辨當、鼻、孝行、
マスク、腹

申し譯だけの麥飯食つてゐる
毒なもので食ふ氣で麥一寸入れ
麥飯と女房愈々世帯じみ
蔭膳も麥飯になる奉公日
遭難のヒュッテ麥飯忘れられず
家庭欄麥の炊き方見分け方
麥七分頂く小あり旅日記
あこがれのランチを小使ふるま
汽車辨の膝元寒い三等車
辨當屋まづカマボコを土臺にし
折鮑辨當一つ一本一つ
辨當のあとに都會の包紙
お茶など賤けて少年工の晝食
一號車辨當なかなかやつて來ず
辨當が濟んで歩くがいやになり
辨當と雜誌かへて女事務
のつけから仲仕辨當へあつてお茶
紅一點あつちを向いてお辨當
辨當へ豊田正子は強ふ生き
辨當箱たまにや鳩でも飛んで出よ
薄情なあいつの鼻が尖つて居
弔詞讀み今度も鼻をつまらせて
ダイヤの光る二號鼻聲
コンパクト鼻高くなれ高くなれ
持參金お里が鼻へぶら下り
鼻聲は男の弱點知つて居り
一平は鼻の位置からまづ決める

性格も鼻も先祖の血をうけて
尖がつた鼻が美學と向ひ合ひ
不倅せ女は鼻を見つめられ
鼻筋が通りなかく貸さぬなり
重役は鼻のあたりで笑ふのみ
仲人は鼻のことも云ひ及び
悲しみの中で僧侶の鼻を見る
惡縁の鼻天井を向いて寝る
赤ん坊に早や氣にしている鼻のこと
女兒安産鼻も高いと書いて來る
低い鼻工場一の働手
元氣だか社長も老けて鼻汁が出る
高過ぎる鼻を氣にする混血兒
鼻聲が綺麗に通るパスガール
鼻までもシヨールに埋め立つて
孫たちに鼻つまゝれて起る朝
孝行の眞似も奉行は賞めてやり
足音へ瀧もお酒になりかける
あんな事孝行なのか俺もやる
孝行のつもり巻壽司買つて來る
孝行のうちには十銭すしもあり
神佛も照覽あれや母の肩
豊作に親を背負つて見せに行く
前借に甘んじ娘國を出る
孝行を子から教はる初老過ぎ
孝行が取柄で嫁ぐ二十八
母の寝顔に優るものなし朝起き
親の恩債務を負ふてゐる氣持
養老の瀧へ來てあゝ只の水
孝行の話うなづくことばかり
孝行を忘れしに非ず酔ふてゐる
孝行をせよと戦地から便り
親のあるうちはとぶくに箸つけず
十人並マスクが鼻のふたをする
少尉殿マスクをとるとまだ若し
十月の散歩へ胸を病むマスク
マスクまではつて刑事承知させ
マスクして借の言譯家を出る
集金人マスクもとらずじまひなり
お正月赤いマスクの子を連れて
葬儀場マスクがまじる遺族席
マスクにも好みがあつて女選り
見違へてマスクの人に叩かれる
マスクをばあごまで下げて立話
兄さんもミツもマスクで連れる
布マスク閣下も掛けて隊を出る

後記

前號は龍が雲を呼ぶ勢ひで素晴らしい實れ行きたつた。一日發行となつた事と大型柳誌でなければ見られぬ表誌が内容の充實とガツチリ四ツに取組んだからであつた。本年はこの勢ひで伸びられる限り伸びるつもりだ。

▼そこで本社會の方でも別項(表紙の二)の如く、會場を變更した。從來の會場よりたしかに明るくて坐り心地がいい。お間違ひのないやうに。



内閣が移つてしまつた。YONAIも可成りスベルは短い、よう無い内閣では語呂が面白くないので、小生は米内に光る。政の内閣と呼んでゐる。それからあらぬか米の二升三升

建國二千六百年記念「柳誌皇軍慰問」

★戦線將兵の活字機に「川柳雑誌」を慰問品として御發送になりたい方は(一)柳誌慰問發送者名・雅號・住所(二)慰問柳誌の受取人の氏名隊名又は住所を明記(三)「川柳雑誌」の號數部數(部數は代前金(郵税本社負擔)で本社内柳誌皇軍慰問係宛に御申込になれば本社代理發送の手続をいたします。一部からでもお取扱いいたしますが二千六百部に達したら打ち切ります。慰問發送者名及び部數を毎號誌上に發表いたします。至急御申込み下さい。戸田孤蓬氏二〇部 田邊由布氏一部

うに此の欄でも一寸廣告しておく。

▼前號で布哇の古川風竹氏が阿部首相のABEはスベルが短かくて米國の新聞では評判がいいと書いて大いに阿部さんの提灯を持つてくれたのに、一月の中旬には米内大將の手にひ分けださ思ふ。

▼高鷲亞鈍氏か久しぶりに「川柳仁義」を塚越正光氏が「台灣川柳社の人々」を寄せられた。

▼本號も原稿が幅濫して載せきれない。御寛恕を乞ふ。(路郎生)

募集

第十七卷 第三號課題

一月末日締切

(十句以内)

光 奥村丹路選

診察券 北川春巢選

第十七卷 第四號課題

二月廿八日締切

(十句以内)

霞 麻生霞乃選

女車掌 濱田久米雄選

每號募集

(毎月五日締切)

近作柳樹(甘樹) 麻生路郎選

川柳塔 麻生路郎選

同舟近詠

各地柳壇(會報)

文章(評論研究感想吟行漫文漫書)

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樹」は全作家の雅號を募る。

▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事

▲書體はなるべく楷書「川柳雑誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は厳守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

定價

一 部 金三十錢

半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢

一箇年前金(特輯號共)三圓六十錢

廣告料

本誌への廣告に就いては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

昭和十五年一月廿八日印刷

昭和十五年二月一日發行

第十七卷 第二號

(毎月一回一日發行)

大阪市西區江戶堀上通二丁目四六番地

編輯兼發行印刷人 麻生 幸二郎

川柳雜誌社

戰轉斷無禁

新證保有は行刊の誌本

る據に法紙罰

大阪市西區江戶堀上通二丁目四六番地(昭和ビル)

電話土佐堀三八三三番

振替大阪七五〇五〇番

店書捌賣

(大阪) 參文社 三越書籍部 明文堂 朝日ビル書店

其他 市内各書店(東京) 東京堂 丸善松堂 吉岡書店

鎌玉森堂 理紀伊國屋 三味堂(神戸) 米田實文館(函館)

石塚(京都) 三宅(名古屋) 靜觀堂

社 係 關 人 々

主幹	藤本卯之助	高尾亮雄	市村松子	岡田某	西尾
贊助員	藤村晴作	生方敏郎	姫田夕鐘	岡田某	西尾
池澤樂居	末弘巖太郎	山本雨迷	岩崎柳路	吉田水車	岩崎松代
長谷川一徹	島山一步	前田五健	大西八歩	須崎豆秋	平佐平三
大田弘雄	沖野岩三郎	大島澤明	高澤一浪	松元紀太	橋本波夢造
岡本一平	大谷五花村	藤原春雨	石井白面人	後藤青兒	藤岡至藝瑠
笠原直方	龜井晟修	藤里好古	川出美根子	宮岡白峰	増元翠陽
嘉納純生	川上三太郎	小林不浪人	中島生々庵	石曾根民郎	田邊由布
田中辰二	川村花菱	森東魚	戸倉普天	中西おさむ	酒井斗風
長崎柳秀	米村あゐ馬	不朽洞會員	北山悟郎	正本史風	天野ト居
長岡中太郎	田村孝之介	橋本綠雨	水谷結美	丸尾紫香	布川集居
長野晴演	谷脇素文	高橋かほる	北山結美	丸尾紫香	天野ト居
藤村晴作	生方敏郎	高橋かほる	北山結美	丸尾紫香	天野ト居
藤本卯之助	高尾亮雄	市村松子	岡田某	西尾	

支 部 と 幹 事

道頓堀支部(大阪)	萬よし	今里支部(大阪)	没食子
九三會支部(大阪)	悟郎	今治支部(今治)	文庫
函館支部(函館)	辰修	光笑會(大阪)	里十九
高知支部(高知)	春水	竹原支部(廣島)	芳泉
梅田支部(大阪)	鮎美	十三支部(大阪)	牧人
篠川支部(島根)	綠之助	廣島支部(廣島)	久米雄
鳥取支部(鳥取)	鐵州	名古屋支部(名古屋)	水車
松山支部(松山)	蛇之鷹	豐中支部(豊中)	紫香
天王寺支部(大阪)	八九滿	下關支部(下關)	市多樓
鶴町支部(大阪)	双虎	北鮮支部(清津府)	美笑
御池橋支部(大阪)	いゐを	蒙疆支部(張家口)	柳路
松江支部(松江)	山川兒	上海支部(中華)	天作
大鐵局支部(大阪)	水客	鐵道病院支部(大阪)	春葉
西條支部(愛媛)	英賀夫	葉櫻支部(大阪)	一波

大正十三年三月三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十五年一月廿五日印刷(紙本) 昭和十五年二月一日發行

川柳雜誌

NO. 193

定價金30錢 送料壹錢

にきびとりに

美顏水



ニキビ

蚤・蚊・南京虫等の
毒虫でカユい時!

然ういふ時にも不思議なほどよく効きま
すので、殊に小さいお子方のある御家庭
などには殊の外重寶がられてゐます。

▲ニキビ吹出物に非常によく効くの
で大評判の薬です。ニキビや吹出物
でお困りの方に大きな喜びの糧ノゼ
とお勧めしたい薬です!

▲定價 一瓶四十銭・六十銭・一圓廿五銭。全國藥店にあり

ニ	吹	ゼ
キ	出	ヒ
ビ	物	此
・	に	薬

5-53

化粧用 美顏水

ア	粧	の
ブ	下	お
ラ	に	化
顔	!	